早稲田商学第三三七号
平成二年三月

ヨーロッパ文化における基礎的思惟の考究

植田重雄

はじめに

1

ヨーロッパ文化はその形成に当って、いくつかの複合文化的要素が考えられる。たとえばキリスト教（ヘブライ系の宗教文化）があるが、単純に一つの流れではなく、ギリシア・ローマ文化の要素があり、ヨーロッパにはいってくる以前に、地中海においてヘブライズムとヘレニズムの混合と変容がある。さらにゲルマン、ノルマン、ケルトなどの原始的要素がキリスト教文化と接触し、一つの習合形態をとった。このことについては、歴史や思想の資料だけでなく、民間習俗、伝承などから今迄に筆者は論証して来ており、多くの論文、著書にとり上げて来た。それ等を踏まえつつ、あらためてヨーロッパ文化形成にあたってどのような基礎的思惟を考えるべきか、その独特な活動性、多様な現象を貫いている内的論理性、思惟形態などをより具体的に歴史的な実証と民俗的な表現形態を通して考察してみようとするのが、本論文の意図するところである。時代の頂点を示す思想家や宗教者の思想ととも

に、民衆の生活の中に思想が生き働いて、はじめて文化は健全な姿をとるのである。

一　神秘思想家の瞑想詩について——アンゲルス・シレジウス

1　瞑想の意義

第二次世界大戦後のヨーロッパにおいて宗教的文化に特徴づけるものがあるとすれば、アジアからのカルチュアーショックとしての瞑想（Meditatio）への異常とも思われる関心とその実践の動きである。鈴木大拙によるヨーロッパへの禅の紹介は、ユングなどの潜在意識、意識下の心理学と相俟って急速に広まった。こうしたアジアルネサンスともいうべきヨーロッパ文化的受容の傾向については、すでに第一次大戦後からはじまっているが、今ここでその問題はふれない。キリスト教は福音伝道、宣教を主眼とするきわめて行動力のある性格をはじめから持っていた。祈りと瞑想は宗教生活における車の両輪である。キリスト教は祈りは熱心であるが、瞑想の占める比重は少なかった。しかし中世にはいるに従って宗教形態が整ってくるにつれ、とくに修道院生活が発展するにともない瞑想が重んぜられるようになった。

禅乃至ヨガの導入を待たずとも、キリスト教には瞑想の道があった。沈黙、静思、観想等々さまざまの行がある。ここに挙げるアンゲルス シレジウスも生涯を瞑想に生きた一人である。彼の折にふれて書き残した短詩の中にその証しともいうべきものが見られる。

瞑想（Meditatio）とは何か。現在のように科学的合理主義が先行し、すべて生活を合理的組織化することを主眼とし、目に見える数量化と利潤追求の社会においては少し瞑想の意味について考究する必要がある。われわれ人間の精神活動を見てみると、合理性のもとで知性が働く部分があり、これはつねに意識的な存在領域である。ここ

では主観と客観は明確に分離して機能し、知性と感情を混同することはない。電車の切符を買うのにも、ゴーストップのある道路を横断するときも、物の売買にも、人間の諸事の約束にも、すべて合理的知性が貫いている。合理性あり知性あるがゆえに、人間の生活は万事スムーズに納得され、とどこおりなく行われているのである。ここではまづ事物をよく観察したり、調査、分析したりし、理解することが必要である。ここでは感情をまじえてはいけないし、きわめて冷静であり、秩序ある良識や常識をもって社会生活を律している世界である。ここでは言語をもって語り合い、互いに理解し合うことができ、ときには記号、暗号を用いて簡略化して了解することもある。

しかしこのような領域は人間の精神のきわめて表面的に波立つところにすぎない。意識化される明白な知性の底には主観、客観がもつれ合い、時に客観化もされるが、濃厚に感情、主観だけしか現われない層がある。人間は知性や理性だけで生きているのではなく、その背後に感情や意欲、衝動、本能の層がある。これを情念の層と呼び、その深さは測りがたく、しかも人間の存在を方向づける力をもっている。とくにさまざまな感情はなかなか表現しにくいが、感情とともに想像力（表象力）が働く。芸術の領域は人間としてたれしも感ずる悲喜、哀楽、怒り恨み等々の情念や美的情感をいかに表現し、言語や造型に具象化し、客観的に提示するかである。また一般の人々が仄かに予感することを、はっきり予知したりすることもこの中に含まれる。優れた芸術家が尊敬されるのは、誰も気付かず、表現できない美を見出し、開示してくれることある。ここでは言語で何とか表現し、伝達できる領域である。

さらに深い層にはいってゆくと、もはや想像や言語では通ぜず、象徴をもって表わすよりほかに表わしがたくなる世界がある。人間の存在の深層には自己自身でありながら、衝動と情念がつねには無意識の深い層をなしている。この潜在意識下の層にはいるためには、言語は通ぜず、ただ瞑想によって感取し、会得する以外に途はない。瞑想の中の最尖端は観想（Comtemplatio）とか禅定とか呼び、宗教的人格性によって出合う以外には途はない。

これは人間の魂の尖端が絶対者とふれ合っているところである。瞑想の中で直観が働き、存在の深層の闇の中で火花が閃めく。瞑想は先づ何よりも自己の心を内面に向け、内省し、息を調え、静慮し、沈黙し、魂を暗い無の大海に沈潜させることからはじまる。人間の内面性こそ人間の最高の価値を探求する場である。このことにアジアはむろんのこと、ヨーロッパでも現代においてとくに気付いてきたのである。まず何はともあれ、シレジウスの瞑想の中から生れた詩作品を見てゆくことにしたい。

神はあらゆるものを超えておられるので、人間は神について何も語ることはできない、
だから神に向っては沈黙をもって敬まうが良い。（二巻、三四〇）

神の尊厳に敬意を表わそうと思うなら、
まず清らかで静寂な沈黙の中にあって神をあがめなければならない。（四巻、一一）

シレジウスはこの二つの詩の中でほとんど同じ内容を云おうとしている。すべてを超越している神について人間が語る言葉はどれ一つとしていい得るものではない。神の尊厳性にはただ清らかで静かな沈黙をもって敬い崇める道しかないのである。この場合沈黙はただ黙っているという消極的な態度ではなく、心を静め瞑想の中へと心掛ける敬虔な態度である。

清らかになり、沈黙し、和やかな心をもって冥合の世界に上昇せよ、

そうすればあなたはすべてを超えて神を瞑想することができる。（同、三六）

「冥合の世界」（Dunkelheit）は意訳で、秘密神密の内容を持つ。本来暗がりを表わす。この詩も前述の詩と同じであるが、瞑想を行うときの心的態度をはっきり示している。

もしあなたがおのれを超越して
神の心におのれを委ねるならば、
あなたの心の中で昇天が行われる。（四巻、五六）

瞑想の道においておのれを超え、おのれを捨てて神の心に放念するとき、「心の中で昇天」が遂げられる。ミスティカーにとっては昇天、復活、死等々はすべて瞑想の主題となる。超越者、実在者との合一、結合が重要な目的である。

最も優れた祈りとは、祈る者がひざまずく対象に
自らが変わってしまうほどの熱烈な祈りである。（四巻、一四〇）

宗教の中で祈りの占める役割は大きい。しかしシレジウスにとっては、祈る対象に向ってただ祈りを捧げるという行為だけで満足せず、拝跪する対象に自らが一体となり、対象そのものになるほどの熱烈さを求めている。祈り

がきわまれば、沈黙から傾聴となり、瞑想一体の境位に変様するのである。

2　われとなんじ

われとなんじの関係のほかには何もない。だからもしこの両者の関係をわれわれが失えば、神はもはや神ではなく、天は崩れ落ちる。（二巻、一七八）

この詩には「あらゆるものはわれとなんじ（創造者と被創物）の関係にある」という題名が付いている。人間の人格的な「われ」が神を人格的になんじと呼びかける関係にこの世界の一切の存在は集約されると見る。もしわれとなんじの関係が崩れれば、神も神でなくなり、一機能としての平板な「もの」に変ってしまう。ここでいう「もの」とは、「われ」と「それ」の関係を意味する。神と人間の抜きさしならぬ関係性を、アンゲルスはつぎのようにも語る。

ああまさに！　われがなんじにおり、なんじがわれにあって一つであるならば、
まことに天は千度も天となるだろう。（同、一七九）

われとなんじの一体観、その結合は純粋な至福へ到る途であり、この境地をさまざまな言葉でシレジウスは歌っている。

「我と汝・対話」(Ich und Du, Zwiesprache) の主著によって、現代の哲学に新しい展望を展いたマルティン・ブーバー (Martin Buber) は、「われ—なんじ」と「われ—それ」を人間の取る態度の二つの根源語として定立した。「われ—なんじ」は全人格を挙げて向い合い、語りかける関係であるのにたいし、「われ—それ」は「なんじ」を第三者の「それ」として客観的に表現し、叙述し、観察する態度である。この場合主体的な出合いの体験ではなく、経験として知識として認識し、学問的に組識体系化し得る領域となる。ブーバーはいろいろな存在の層を貫いているこの二つの根源語をこの著の中で探っている。たとえば自然と人間、人間と人間の間に見られる「われ—なんじ」と「われ—それ」であり、ついには永遠のなんじである神と人間の関係に到達する。現代の人間の存在の危機は、途方もない「われ—それ」の支配が文化と生活の上に及ぼしていることにあるとブーバーはいう。人間の生活は「われ—それ」による体系化、組織化が行われ、知的な普遍化がすすみ、自然も人間も機能化されつつある。人間の能力も活動性も数量的なもので計算され、したがって劃一性が生活の全面をおおうている。経済、政治は国民の生活を統制化する傾向をもつ。自然を生活に利用する人間は、ついに人間をも自己の政治、経済、文化目的に利用しようとする。「われ—それ」の世界は経験と利用の世界である。

カントは純粋理性批判を通じて自然科的存在論、認識論の基礎付けを行った。哲学の基礎によって自然科学は以後、哲学とは別に独立して独自の道を歩み、尨大な知的集積と体系化をすすめつつある。カントの哲学によれば時間・空間は人間にとって先験的直観形式であり、そこに存在する因果律 (Káusalität) を超えられないと見る。ブーバーはかかる先験的観念論から離れて人間はいかにして実在性 (Realität) に到達するかという問題に取り組む。このようなカント哲学への挑戦は、キェルケゴール、ニーチェ、ベルグソンなどによって試みられてきた。ベルグソンが神秘的直観を重んじ、創造的生命の「生の飛躍」を強調するのも、新しい思惟のあり方の模索であった。ブ

ーバーの「われ—なんじ」の対話（Dialogik）もまた人間のとる態度の転換を目ざし未来の希望をみるのである。

ここでブーバーとシレジウスの考え方の比較を厳密に行う必要はないが、シレジウスも「われ」と「なんじ」の関係を強調しながらも、彼はこれを普遍的に対話の哲学に発展させるのを目的とせずに、瞑想によってあくまで神に近付く人間の態度の徹底化を押しすすめている。

わたしはわれでもなんじでもない、
あなたがわたしの中のわれである、
それゆえ　神よ、心からあなたに感謝をささげるだけです。（同巻、一八〇）

シレジウスは自己の「われ」、「なんじ」を否定し、ただ自己の中に存在するのは、神の「われ」のみであることを宣言する。「われ」と「なんじ」の向い合う緊張関係は消えて、神ひとりの天が成り立つ。あるいは神と人間の合一に達する。瞑想の到りつくところ感謝が捧げられるのである。これが両者のちがいである。

中心点におのれを据えてみよ、
そうすれば今もそのあとも地上と
天国に起るすべてのことを
あなたは同時に見る。（同、一八三）

この世でただ神のみを見、それ以外に何も見ない人、
このような人は天国で
神の玉座近くにいるケルビムとなるだろう。（同、一八四）

中心点は神であり、そこに身を置くことは、己を捨てて神の立場に立つことを意味し、神だけを見つめるケルビム天使が理想となる。このような態度はさきにあげた詩の内容を一層補強するものである。ちなみにシレジウスはこの短詩型の詩集の題名を「ケルビム天使の如きさすらい人」（Cherubinischer Wandersmann）と名付けている。このような天使を理想として宗教的生活に励んだのである。

3　内面性について

人よ、正しく祈るとはどんなことかを知りたいと思うならば、
あなたの中にはいってゆき、神の心にたずねなさい。（一巻、二三七）

シレジウスは外面的に見られる普通の祈りを否定する。祈りの代りに、沈黙し、静かに瞑想する。瞑想こそ神に近付く道であると考える。とに角先ず自己の内面を見つめること、この内面性にはいって、そこから神の心を見出さうとする。彼は「沈黙の祈り」を強調する。

言葉は他人の口よりもむしろあなたの内（面）でずっと多く響く、
だから今からは、沈黙しその言葉を聴きなさい。（同、二九九）

このように内面において沈黙の中にきこえてくる言葉を聴くことをすすめる。これがシレジウスの一貫して行ってきた宗教生活であった。

わがキリスト者よ、あなたはどこに走ってゆくのか、天国はあなたの中にある。
あなたは全く別の扉のあたりで何を捜し求めようとしているのか。（同、二九八）

天国を外に求めて走ってゆく人々に向って、シレジウスは呼びかける。あなたの中（内面）を見つめよ、それが天国に到る門であり、そこが開かれて天国にはいるのである。

わたしの愛もあらゆる存在物もすべて神の残響である、
わたしの心の奥に耳を傾けるならば、
わたしの神も、あらゆる存在物もそこに存在しているのだ。（同、二三三）

心の奥に神が耳を傾けるように、自らも心の奥に耳を傾ける。これが瞑想する者の道である。やがてつぎのような確信にたどりつく。

（何と素晴らしいことか）、わたしの肉体は神が住われる所である。
だから神の住むこの肉体をとるに足らぬことだと考えてはならない。（同、二四一）

わが内面だけに住うのではなく、わが身体、わが肉体が神の宿る場所であるとシレジウスはいう。彼は瞑想を抽象化せず、自己の全存在で受け取り、神を感受しようとする。心身は二元ではないからである。

神が天国を与えてくれるのではない。
あなた自身が自分のところへ天国を引き寄せ、全力をふりしぼり、情熱をかたむけて得ようと努めなければならない。（同、二一一）

瞑想はどちらかというと消極的なあり方と考えられやすい。沈黙し、目をつむり、端座して何もせずに、何も考えずいる状態は静かではあるが、受身の如く見えるのは、瞑想が陥ち入りがちな陥穽である。天国は待っていれば神の方から与えてくれると考えるのは間違いである。積極的に全心全霊をあげて自分のもとへ引き寄せ、獲得しようと努力しなければならない。またつぎのような詩の告白もある。

キリスト者よ、
あなたが心のすべてをあげて幼子になるなら、
すでにこの地上において天国はあなたのものである。（同、二五三）

聖書においてキリストは幼子のごとくならなければ、天国に赴くことはできないと語っている。シレジウスが瞑想を通して感得することは、もし純真な幼子になれるならば、来る世ではなく、今直ぐ、否、もうすでに天国はこの地上に実現していると見做すのである。人間は神の子であり、神の幼子でなければならない。つぎの言葉もそれを暗示する。

神が永遠に願い求めているもの、
それはわたしの中に神の似姿を見ることである。（同、二七二）

人間である「わたし」に神がいつも願っていることは、神の比喩（Gottes Gleichmis）である。聖書（とくに創世紀）の基礎的思想となっているのは、人間は神に似せて創られた、神に象（かたど）られて創造されたという考えである。これを神の肖像性（Gottes Ebenbildnis）と呼んでいる。別言すれば神の霊（Ruach, Puenma）が人間に与えられているともいえるし、神が人間の中に宿るという表現をもとる。ユダヤ教においては人間には神の霊が宿る神の宮（シェキナー）（Shekinah）が内在しているといわれている。ここにおいて神と人間は結合することが可能なのである。シレジウスもまた瞑想体験の中にこれとはちがうさまざまな表現をとっているが、帰するところは一つと見ることができる。

4　再び沈黙と静寂について

ああ、あわれな者よ、あなたは大声を出すことが、
静寂な神性にたいする讃歌であると思っているとしたら。（同二三九）

大きな声を出していたづらに讃歌を歌ったり、祈りを唱えるとしたら、これこそ静寂そのものを本質とする神性に反するものである。現代の哲学者マックス・ピカート（Max Picard）は「沈黙の世界」（Die Welt des Schweigens）の中でつぎのように叙べている。「沈黙の中ではじめて人間は神の神秘に出合う。――この沈黙から生れ出る言葉は、まだ何事も語ったことのない最初の言葉のごとく根源的である。それゆえ、この言葉は、神の神秘を語る能力がある。神の神秘がいつも一つの沈黙の層を拡げていることは、神の愛の現われにほかならぬ。沈黙によって神の神秘に近付くとき、人間は自らもまた沈黙の層をあらかじめ備えねばならぬことを知らされるからである。人間の内部にも、外的周囲にも、喧噪しかない今日、神秘に近付くことはむつかしい」。彼の悲嘆のごとく現代科学、技術文明全体は劃一化と騒音の非人間化の状況が増大しつつある。

敬虔派（Pietismus）の宗教詩人ゲルハルト テルステーゲン（Gerhard Tersteegen）は絹織物を織る工人であった。彼は働きながら口から讃歌が湧いて出たといい、また深い瞑想の生活に没入した。

あなたの天の光の美しきもの、
わたしはあなたの小さき星となり、

ここかしことまたたきます、
今こそわたしはあなたの御心に帰りゆきましょう、
主よ、あなたのみがわたしに語って下さるように、
深い静けさの中で
暗きにあるわたしのもとで、

これはテルステーゲンの詩集、「夜醒めある者の帰依」(Andacht bei Nächtlichen Wachen) の中の詩である。「深い静けさ、暗きにあるわたしのもとで」の詩句は、沈黙と静寂、内面の幽暗に沈潜している状況である。彼は星の夜空にまたたく星を仰ぎながら、詩情の昂まりとともに神へ帰ってゆく魂を思ったのである。つぎの詩も同じである。

あなたは最高に充ち足れる存在者、
わたしの魂の友、唯一人の安らぎである、
あなたはかくも身近かにをられるので、
わたしの中に安らぎを知る、
あなたがいられるそこへ帰りゆきましょう、
あなたはわたしの心と結ばれている、
暗い至聖所にあって

わたしは祈り、沈黙する、
おお畏敬にみちた沈黙よ、
至高の語り主はわたしに語ることはない、
しかし、愛と謙遜をもって
沈黙の中で語り給うのだ。

この至聖所はかならずしも歴史的なエルサレムの神殿を指すのではなく、ここでは神に呼びかけ、瞑想するところを意味している。現代の合理主義では沈黙が語るということは非合理的に理解しがたいかもしれない。目に見えない世界を信じないからである。マックス・ピカートは現代の人間の危機的状況をつぎのようにいう。

「現代の世界の状況、いな生活全体が病んでいる。もしわたしが医者でこの病いを癒やす方法をたずねられるならば、わたしは〈沈黙をつくれ〉と答えよう。事実、人間を沈黙へもたらすこと以外にあり得ない。神の言葉はこのような有様では聴きとれるものではない。もし神の言葉が喧噪の中でも聞えるようにと、ことさらに喧噪の手段を用いて叫ぶならば、それはもはや神の言葉ではない。それゆえ、まず沈黙をつくれ！」（同書、一二〇頁）。「沈黙」、「瞑想」は特殊な個人の宗教的訓練のためではなく、行詰り、多くの障害を生みだしている文明を更新させるためにも必要なものとなりつつある。

5　薔薇について

薔薇はなぜという理由なしに咲いている、
薔薇はただそこに咲いているだけだ、
薔薇は自分のことを意識しないし、
またひとが見ているかどうかも気にしない。（同巻、二八九）

瞑想による神秘思想の境地を歌い上げている詩である。日の光を浴び、さわやかな大気の中で無心に咲いている薔薇の花に瞑想の理想の姿をシレジウスは感じたのであろう。

ここにあなたが外面的な眼で見ている薔薇は永遠に神の中に咲いている。（一巻、一〇八）

この詩句は前掲の詩句との関連で味わうとき、一層その深い意味が現われてくるように思われる。人間は薔薇の美しさに魅かれ、感動しても、なお外面的なものにとらわれている。神の中で咲いている薔薇であるという想いによって、咲いて散る薔薇でなく永遠の存在となる。一輪の薔薇に神の恵みが無限にそそがれるのである。

神に愛され、しかも美しくなるには、どのようにしたらよいか、
あなたがた人間は、野の小さき花から学ぶがよい。（同巻、二八八）

この詩句はキリストの山上の垂訓にある「ソロモンの栄華だに、一茎の野の百合に如かず」を前提とする。単純に素直に「野の花」に親しむことは、神の心に適うことであり、人間自身も浄化され、美しくなるのである。

キリスト者よ、どうしてあなた方は齷齪（あくせく）しているのか、
たれが百合の花を飾り、水仙を育てているかを思え、

この詩もまた「思い患うなかれ」という山上の垂訓に基いている。神に一切を任せ、無心に咲いている花に神の国の真髄をシレジウスは見る。

薔薇を見るのをわたしは好む。薔薇は純白であり、真紅でありながら、
わたしの血の花婿、わたしの神と同じように茨にみちているからだ。（三巻、八四）

シレジウスは薔薇をたんに美しい花であるというだけでなく、十字架の苦難、キリストの血をも瞑想する。このような見方は、他のヨーロッパ人一般にも通ずる基礎的思惟であるかもしれない。

主なる神よ、わたしの心があなたの潔白の中にあって純白に、
あなたの血によって真紅となるよう心から祈ります。（同、八五）

薔薇の純白、真紅はキリストの無実、無原罪、罪のゆるしの血の象徴となり、瞑想の中に生きつづける。瞑想はつぎの詩のようにさらに展開する。

キリストよ、あなたは受難と十字架、苦痛の中にあっても、凋るることなく
薔薇のように花咲くのだ
何と幸いなことであろうか。（同巻、八六）

詩人ノヴァーリスに「青い花」と題するロマンがある。これを求めて主人公が人生を遍歴し、精神的成長を遂げてゆく。キリスト伝説の中に、十字架の死を遂げたとき、茨の冠にただ一度だけ青い薔薇が咲いたことがあったという。瞑想はさらにつぎのように転換する。

薔薇のようにあなたの心を神に向って花開かせるとき、
神とそのすべての財宝をあなたは受けつぐのだ。（同巻、八七）

ここでは薔薇は素直に神に向って心を開き、われとなんじの純粋性に生きることを意味する。神のさまざまの財宝を受けつぎ、神の国を形成する。

友よ、あの世で清らかな薔薇を手折ろうと思っている者は、この世において

茨の棘に大いに刺されなければならぬ。（同巻、八八）

無条件に天上の薔薇を得るのではなく、茨の棘、（苦難の十字架）をかむり、血を流さなければならない。ヘブライ的思惟はこのような逆説をつねに瞑想と祈り、行動に保持してゆくところに特質があるといえる。

薔薇はわたしの魂、棘は肉の快楽、春は神の恵み、寒気と霜は神の怒り、
薔薇の開花は善のうながし、肉の棘にとらわれることなく、徳によって身を飾り、
天国を切に求めよ、
薔薇は時節を感受し、春になれば花が開く、
かくて薔薇は永遠に神の薔薇に選ばれるだろう。（同巻、九一）

これは今までの詩と異なり、瞑想の中から溢れでた薔薇の讃歌である。薔薇に托され、薔薇を通じての神秘の働きである。この詩には「薔薇の神秘」(Die Geheime Rose) の題を付けている。今まで挙げてきた薔薇の詩は、シレジウスの瞑想と詩的創造力の閃めきによるものであるが、ローゼン・クランツ (Rosen-Kranz) の祈りにも一脈相通うものがある。

6　神の子の誕生

神の霊が全存在をあげて、あなたに触れるとき、
あなたの中に永遠の子が誕生するだろう。（二巻、一〇三）

「神の子の誕生」はキリスト教の宗教思想の基礎的思惟の一つであり、出発点から重要な課題となっている。当然神秘主義の瞑想でも最大の関心事が寄せられ、シレジウスはこの詩集で幾度となく、いろいろな角度から自己の心証体験として表白している。神自身も全存在をあげ、全心全霊の愛によって人間に触れるという。そのとき、永遠の子、神の子はかならず生れるとシレジウスはいっている。人間を神の子となさずば止まない熱烈な誓いが、神の救いなのである。

あなたの魂が処女のように清純で、
マリアのように浄らかであれば、
神によって瞬時に魂は受胎するにちがいない。（同巻、一〇四）

マリアにあってイエスの誕生があったように神の子の誕生は人間の魂が清浄になりきるならば、起り得る。マリアは神の意志に素直になった一つの典型であり、キリスト神信仰の出発点、教会成立の礎石である。またつぎのようにも思索している。

マリアは神の子を目に見えるように外面的に生み、わたしは神の子をわたしの魂の中に生み、父なる神は神の子を永遠にお生みになる。（五巻、二四九）

ナザレの一女性マリアが神の子イエスを生んだのにたいし、シレジウスは自己の魂に神の子を生むと叙べている。これは瞑想による神秘主義の態度である。永遠に神の子を生む神のあり方について霊的な出産をするわたしのそれとは一つものであるとつぎの「二五〇」の作品では断言している。

神は自身の子を生んでいる。時間の外に生むので、誕生は永遠に続くのである。（同巻、二五一）

神は人間と異り、時間・空間を超えている。「永遠の子」と呼ぶのは、神は神の子を永遠に誕生せしめねば止まぬ意志を持つからである。マリアと自己の神の子の誕生の差異を強調する一方、又つぎのような表白もある。

神のいつくしみが純真な神の乙女であるあなたの心を覆い尽すとき、
あなたは神をいただき受胎する。（三巻、三三）

前掲（二巻、一〇四）と同じ発想である。ルカ福音書に有名なマリアの讃歌が歌われているように、神をひたすら信じ、心身を神に献げたマリアにして神の子の誕生ははじめて可能である。

ああ喜ばしい、神が人となり、すでに誕生された。どこであろうか。わたしの中にである。神はわたしを母に選ばれたのだ。どのように。魂はマリアであり、わたしの心が小さな飼葉桶である。身体が馬小屋。新たな義がおしめと腹帯、神への畏敬がヨセフであり、心根の力を喜ぶのは天使である。心の明るさが稲妻、純潔の思いが神を見出す牧人である。（三巻、二三八）

神の子の誕生は、神がこの世の人間となって生れることである。ここではシレジウスは神の子を生むマリアを自己の魂とし、飼葉桶、馬小屋、牧人その他ベツレヘムの出来事はすべて内的な比喩となる。彼はこの瞑想詩を「神の内面的な誕生」(Die innerliche Geburt Gottes) と名付けている。

マリアは水晶であり、彼女の子は天からの光である。だから子はマリアの身を貫いて進むけれども、マリアは身を開く必要はない。（三巻、二四二）

水晶とこれに射し込む光でマリアとキリストの母子の関係の暗喩とする。光を透過する水晶は、明るく清らかに澄んでいることを意味し、さきの詩にもあったように、「御心の如くなれかし」と天使ガブリエルにマリアが答えたごとく、彼女の神にたいする絶対帰依、純粋無垢の透明性にほかならない。

たとえキリストが千度もベツレヘムに生れたとしても、
それがあなたの中でないならば、

全く意味のないことである。（一巻、六一）

シレジウスの宗教観の魅力というか、味わい深いところは、今までに掲げた詩句でも十分に伺われるが、とくにこの作品は彼の瞑想の神秘の特質をよく示している。キリストは歴史的にはただ一度ベツレヘムに誕生した。そのキリストが千回生れたとしても、「あなたの魂の中」に誕生しなければ、すべて無意味なのである。シレジウスにかぎらず神秘思想家たちは、教義や教会の教えだけにあきたらず、自分自身で神と出会い、神を身を以て体験しなければならないという果敢な精神的冒険を行っている。

中世の神秘思想の「眼」とよばれるマイスター・エックハルト（Meister Eckhardt）は、いわゆるミスティックのおちいりやすい神と人間の合一による忘我的恍惚、結合の脱魂歓喜に溺れることなく、瞑想による思索力の深さ、冷徹な透徹性を貫いている。彼の最大の宗教的課題は、聖書や教義の解釈や言葉の意味ではなく、ミスティックの根源を解明することにあった。

その一つのしかも重要な課題は、「神の子」となる体験を、いかに自己の魂の深みにおいて為し遂げるかにあった。その中心的核となるものは世界根源（Weltgrund）に魂がいかに契約をなすかにある。世界根源はたえず創造してやまぬ。世界根源に触れることは、人間が非人格的な存在に解消することではなく、あくまで「完全な人間になる」ことを目ざしている。これは中世のゴチック的な昇華向上の精神であるといってよい。

エックハルトは人間の精神をつぎのごとく定義づけている。「精神とは、永遠の中に存在する以外のなにものでもない。精神はすべての数や量を打破して前進しなければならぬ。それは神によって打破される。けれども神がわたしを打破するように、わたしもまた神を打破する。神は「純粋な一者」（ein lauter Ein）であるがゆえに、この

精神を荒野と永遠性に導く。この精神はなぜという理由はもたぬ。この精神は永遠性と自由性の中にあるのだ」(Meister Eckhart hrsg von Pfeiffer. S. 91)

人間と神の相互の関与のあり様を「打破」(Durchbruch) という言葉であらわしている。「人間が完全な人間になること」は、神が人となる「受肉」(Inkarnatio) であり、魂の内面に神が誕生することであって、外面的な諸条件によってではない。

エックハルトは神の子の誕生についてつぎのごとく語っている。「……魂の中には力があり、時間にも肉体にも傷われることなく、精神から湧き出、精神の中にとどまる完全に精神的なものがある。魂の力の中で、神は自己と全く同じように、すべての存在とともに喜び、すべてのものとともに栄光を輝やかすことを願っている。このことはきわめて深い心の喜びであるために、たれも言葉でいい表わすことができない。なぜなら、この魂の力の中で父(なる神)はたえず永遠の子を生む。この魂の力は父の子をともに生み、自己をわが子と同じくさせ、父の神的力と一つとさせるからである。もし全三国や地上の一切の富を持っている人が、神のためにすべて捨て去り、この世のもっとも貧しい者となり、神が与えるもっとも苦しい苦悩を味わい、死に至るまで耐えしのぶならば、この人にただ一度、一瞬魂の中に神の力があることを神は見せて下さるとき、彼の喜びは大いなるものとなり、苦悩や貧しさは消え失せる。……神が永遠の現在にあるごとく、人間はこの魂の力の中にある」。

このエックハルトの言葉には、荒野の試練を受け、貧しき者となり、十字架の苦難を嗜めて死を遂げたキリストが原像となっている。そこに神の子の誕生が可能であるとみる。シレジウスはさらに「神秘の再誕生」(Geheime Wiedergeburt) としてつぎのように発展する。

人は神から生れ、キリストにおいて死に、聖霊にあって生き始めるのである。（三巻、六三）

人間は神の子として父なる神から誕生したのちには、一粒の麦が多くの麦となって生れるように、十字架に死んで幾百千の聖霊となって再誕生する。聖霊の働きはすべての存在に活動し、新たに生命を生み、調和を与え、存在の意味を明らかにしてゆく。これが創造の目的であろう。神の子の誕生のテーマはこのようにして再誕生を遂げることによって人間の完成を見るのである。

希望をもって麦の種子を地に蒔けば、天国への種子もまた蒔かれるにちがいない。（三巻、一九八）

もし希望という意味を神の子の誕生、人間の完全性への願いということであれば、たとえささやかな農耕の営みであろうと、すべては天国の実現につながる。この詩句がドイツの農家の「家の銘文」（Hausinschrift）として掲げられているのを見かけたことがある。

7　再び瞑想と内面の問題

この世界のものだけでは、美しい天国の牧場の価値は分らない。どうしてであるか。

瞑想しなければ、何も分らない。瞑想が足りないのだ。（六巻、二一九）

目を転じて、この世が空しいものであることを、あなたは瞑想せよ。
この世を正しく瞑想しない者は、かならず堕落する。（同、二二二）

シレジウスは人間として瞑想の生活がかならずなければならぬことを強調する。この世界がいかに「空しいか」を正しく瞑想すること、この世界のものに執着し、その空しさを実感しないところでは、天国の美しさが分らずやがて道を失い、堕落する。

愛は瞑想の結果生れる。永遠なものを瞑想せよ、さうすればただちに永遠なものを愛するようになる。
そうでないとすべてはつまらぬものに固執することになる。（同、二二〇）

朽ちるはかないものではなく、朽ちざる永遠なものを瞑想によって希求する。このようにして愛が生れてくるとシレジウスはいう。真の美、真の喜びを切に望むものが湧き上って宗教的な価値がはっきりと見えてくるからである。

魂の世界にあっては感覚はすべて一つの感覚となって働く。
神を見る者はまた神を味わい、感じ、香りをきき、声を聞く。（五巻、三五一）

不思議なことに、外面的な意識的世界においては視覚は視学、味覚は味覚、触覚は触覚、嗅覚は嗅覚というようにそれぞれの感覚は別々に意識され、その働きが分れている。ところが内面に心を向けると、瞑想の中ではこれら

の感覚はすべて一つとなり、結合した状態で働く。それゆえ「神を見る者」は、神を味わい、感じとり、香りをきき、声を聞くことが同時に可能となる。内面の世界、魂の世界とはこのように普通の外面的な感覚や意識とは異っている。

魂は二つの眼をもっている。一つの眼はこの時間の世界を見つめているのにたいし、もう一つの眼は永遠の彼方のものに向かっている。（三巻、二二八）

この世と彼の世の二つについて見つめる魂の目をシレジウスは歌っている。双方を見なければ健全ではない。さきにエックハルトの「神の子の誕生」の中でのべたように、魂の力についてシレジウスも一つの重要な信条を吐露している。

魂の力は大いなるものである。神自身も魂に自らを打明けられねばならない。
また魂の意志が働かなければ、けっして魂から逃れることはできないのだから。（同、一四六）

「魂の力」、「魂の意志」あるいは「内面から動くもの」などはすべて同じ内容である。神も人間の魂に自身の心を打明けられるという確信、この不即不離の関係は宗教以外の他の関係で見ることのない特質である。

神自身が天国である

天国にはいりたいと願うならば、
あなたの内にある神の存在に光を当てねばならない。（二巻、一二五）

人間の内面をとおして、すでに人間の中に内在している神をまず凝視することである。人間の魂の内面は天の神のすみ給うところ、神の住み家である。

8　放念について

友よ、つぎのことを信じてほしい。もし神が天国へ行くなとわたしに命ぜられるならば、
わたしは喜んで地獄にとどまろうとおもう。（二巻、一三三）

「放念」(Gelassenheit) はキリスト教神学、とくに神秘主義では重要な中枢的概念である。神への絶対随順、帰依の態度である。つぎの詩句もまた同じものを指向している。

能力、権力、芸術、学問、富などの虚しい装飾をわたしは好まない、ただ、子としてわたしの父の中にいたいだけである。（同、一三五）

さきに掲げた「この世」と彼の世と同じように地上のさまざまな能力をすべて捨て、神に帰依することをシレジ

ウスは強調する。「おのれを捨てよ」という言葉は幾度も瞑想の都度表白している。つぎの詩によっても明かである。

おのれから出てゆきなさい、さすれば神がはいって来て下さる！
おのれに死になさい、さすれば神に生きる、
存在を止めよ、さすれば神が存在して下さる
何もするな、さすれば神の教えが行われる。（同、一三六）

この四つのリフレインは同一の自己棄却、放念を強く表わしている。「同巻、一四〇」でも「おのれを滅せば滅すほど、多くの神性を共有する」とも歌っている。

徹底的におのれを無にする者は、
永遠に自由となり、神と一つになる、
彼と神の間には区別すらなくなるだろう。（同、一四一）

放念し、おのれを無にする者は神と一つになり、永遠の自由を獲得するのだとシレジウスは宣言する。彼は放念の定義をつぎのように歌っている。

放念とは何か、
率直にわたしは言おう、
あなたの魂の中にイエスの意志があることである。（同、一四四）

放念が神をとらえる、
だが神が自らを捨て去る放念は
ほとんどの人間にとって全く理解を超えている。（二巻、九二）

この詩句には「もっとも神秘的な放念」(Die Geheimste Gelassenheit) という題を付けている。放念は人間が神にたいして行うだけではない。神自らも人間にたいして放念する。その純粋行為によって愛が全うされる。人間からの放念は考えられても、神のそれに気付くことは少ない。すべては愛を相互的に向け合う。放念を「魂の放棄」(Die Aufgegebenheit) と呼んでつぎのような詩句をのこしている。

おのれの魂を捨てて、放棄しつくした人は、
神におのれを賭け、
至福に満ちて生きる。（同、二〇〇）

9　神の性格

神は純粋な輝きであり、暗い無でもある。
いかなる存在も己の光では見ることはできない。（二巻、一四六）

シレジウスはこの瞑想詩の中で神の性格をさまざまに語っている。神を光とし闇としており、しかも被造物自身の光では神を見ることができない。このような定義を基調にして展開している瞑想の数は沢山ある。その中のいくつかを考察してみたい。

わたしと神の間に違いはあるか、
一言でいえばただ他者性があるのみ。（同、二〇一）

神は他者性（Anderheit）として人間に対する以外の他のものではない。これは人間と他の存在者の間に見られる他者性と全く異ることを強調している。さきに掲げたように神は「すべてを超えている」こと、絶対性（至高性）を以て人間に迫っていることなどである。

人間はあらゆる名で至高の神を呼ぶことができるが、
反対に神を一つの名だけで呼ぶことはできない。（五巻、一九六）

神は多くの名を持ち、さまざまの性格、活動を示される。その反対に神は一つの名も持たない。神の名をみだりに呼んではならぬというモーセの戒めは、神名すら神の本質を適格に表現できないからである。それはつぎのような神の捉え方にもうかがわれる。

神は何ものでもないし、またあらゆるものでもある。これはけっして詭弁ではない。なぜなら、神と名づければ存在し、名づけなければ存在しないのであろうか。（同、一九七）

神学的な思弁においては神は無であるとともに、すべてであるといった逆説的表現がつねに用いられる。

神は常に肯定（ja）だけを語るが、悪魔は常に否定（nein）だけしかいわない、だから悪魔は神に肯定はいわないし、神と一つになることもあり得ない。（二巻、四）

ここの詩句は旧約聖書のヤハウェの神の名（YHWH）に基いて、存在を存在たらしめる根源者であるがゆえに、ドイツ語の肯定（ja）の意味で捉え、これに反対するサタンは否定の対立者と見做したのである。

地上のすべてのものと同じように、神はわたしを愛して下さる。もし神が人間としてまだ誕生していなかったら、かならず神はわたしになられたであろう。（五巻、一九三）

神の子の誕生は、キリストだけでなく、全人間のものであり、ひとりひとりの人間に可能である。神の注ぐ愛を自己の内面に受け取ろうとしているシレジウスは、瞑想の中に神の子の誕生を確信する。

神はキリストの中では神になられ、
天使の中では天使の姿になられ、
人間の中では人間になられ、
あらゆるものの中では望むがままにあらゆるものの姿となられる。（同、二一四）

神の本質は愛にあり、天使にも人間にもなり、すべてのものにもなって、救いの機を待つのである。神の働きかけの特質は、神が神のままにとどまらず、一切にその光と力となって一切に及ぼしているとシレジウスは思索している。神を瞑想することが、どのような意味を持つか、つぎの詩句はそれを長い間の体験の中から告白している。

友よ、もし神を瞑想するならば、
神なくしては永遠に見抜くことの
できないものを一度に直観する。（同、二一七）

瞑想の中でも神の瞑想をとくにシレジウスは重視している。この瞑想によって他では見抜くことのできない、また到達しがたい境地へたどりつき、全的に一切を直観する。これはシレジウスが生涯をかけて見出した瞑想におけ

ると神との切離しがたい統一性である。

神はただ真に存在しているのであって、その他のことについてわたしがあなたに語っているように、神は愛したり、生活したりしているのではない。（二巻、五五）

神はただ存在しているのであり、人間的に愛したり、生活したりしていないという断定は、神の性格を如実に明らかにしている。神を真なる存在としてのみ定義し、挟雑物をすべて切り捨てている。

神は霊であり、火であり、存在であり、光である。
だが同時にこれらのいかなるものでもないのだ。（四巻、三八）

「神は霊なれば、霊をもって拝すべし」と聖書も述べており、モーセはホレブの山で茨に燃える火の中に神の声をきく。神の性格について今まで触れてきたように多様なものがある。それにもかかわらず神はこれら一切を超えていると否定する。これは神の不可測、不可称、人間の思弁の彼方にあるもの、畏敬をもって崇めるものという敬虔な想いである。

10　愛について

この世の愛の本質は下降するところにあり、
神の愛の本質は上昇するところにある。（五巻、二八八）

一般には神の愛は高いところから人間の方へと降って来、人間の愛はこの地上から天の彼方を目ざして昇ってゆくと考える。しかしアンゲルス・シレジウスは全く逆の考え方をする。人間の愛ははじめは純粋なものであっても長い時間が経過し、状況が変ってゆくといつの間にか愛が汚れ、重いものとなって沈み、下降線をたどる。これにたいして神の愛はどのように重く澱んでいるところでも浄化に浄化を加え、ついには軽やかに飛翔する小鳥の如く雲の如くに清浄なものに向上させて止まない。

美は愛から生まれる。神の御顔も愛から生れる美しさを持っている。
さもなければ御顔も輝くことはない。（同、二九二）

この詩句についてはあれこれ説明の言葉を必要としない。神の御顔の輝きは、神の栄光の輝きである。美から愛が生れるのではなく、愛から美が生れると考える。ヘブライ系キリスト教的思惟においては徹底して愛が一切の基礎になっている。シレジウスの瞑想の中にも愛が中心となって燃えているのに注目したい。

あなたの内面にあって神が示す愛こそ、神の永遠の力であり、火であり、聖霊である。（同、二九六）

積極的に愛が力であり、火であり、聖霊であるといい切っている。ただし「あなたの内面にあって神が示す」ものであるところに、瞑想の静寂に身を投じて探究したシレジウスの面目がよくうかがわれる。

黄金が純粋であるかどうかは、火の中で試され、
あなたの愛が純粋であるかは、十字架で試される。（同、三〇四）

子供よ、あわれみとともに生きよ、
あわれみは祝福の城の女性の門衛である。（同、三一四）

愛の試練は十字架によるとするのは、シレジウスは瞑想によってもはやはりここに至りつくことを示す。「あわれみ」（Barmherzigkeit）を女性の門衛と呼ぶ。「あわれみ」も愛の静かでやさしい姿と見るからである。

恋に病む心は、神の剣によって貫ぬかれ、傷つけられて、はじめて恢復するのだ。（四巻、七〇）

シレジウスの詩の中では、人間の恋に病むテーマにしたものは、珍らしい。しかも恋の病いを神の剣で刺し貫き、傷を与えることによって癒し得るとしている考えも、瞑想に徹した態度から生れたものであろう。

11　光について

栄光の光を太陽と仮定すれば、
恩寵の光はその光線であり、
自然の光はその反射光と呼ぶのがふさわしい。（五巻、三三五）

神の栄光と、恩寵と自然を太陽の比喩を用いて思索した。光もその内容をよく検討すると、それぞれの役割と働きがある。つぎの詩は光によって正しい認識が得られるとする簡潔な詩句である。

さあ、夜明けの明星を呼びゆこう、
夜が明けて、はじめて何が美しく
何が美しくないかがはっきり見えるのだ。（二巻、一九四）(39)

現在ヨーロッパで瞑想の行をする人々は、とりわけこのシレジウスの詩句を愛誦する。明けの星とともに曙紅が射し、光に満ちる朝を瞑想の夜明けとするのである。シレジウスには夜明けをテーマにした詩句が多く、夕方や夜は少ないのを特徴としている。これについては考察すべき問題があるが、ここでは今取り上げないことにする。

正しき人は太陽の光のように輝く、だからやがて神は光に満ちた太陽になるであろう。（二巻、一二四）

太陽の象徴は無限であらゆるものに及ぶ。正しき人（真実に生きる人）は、神の太陽の光となる。

夜明けの光は美しい。しかしもっと美しいのは魂である。神の光は身体の洞窟の隅々まで照らし出す。（三巻、一四四）

大自然の夜明けの光を美しいと感じながらも、それより美しい「魂」を讃美する。神の光が隈なく人間の魂を照らす荘厳な光景をシレジウスは瞑想の中で思い浮べているのである。さきに掲げた夜明けの待望は、光の待望であり、夜明けは神の光が魂に射しいる光景を暗示する。この世界の一切は神の讃美の比喩となる。

美は光である。光が欠ければ欠けるほど、あなたの肉体も魂もますます忌わしいものとなる。（一巻、二八七）

隣人の中に神とキリストを見る人、
その人は神性から輝き出る
光によって見ているのだ。（同、二一八）

美を生み出す光は、神性から輝き照し出す光であり、シレジウスにとって根本的な基礎観念である。

11　天使について

子よ、天使のようになりたいと思うなら、
もう用意は完了である。
どうしてでしようか。
天使たちはいつも煩わしいこの世界に生きているからだ。（二巻、一三九）

天使は神の使者としていつも煩わしいこの世界に降って来、人間の生活や悩みなどを見守っている。神と人間の中間的存在である。

聖者は神の中に安らぎ、ケルビムは神を見、セラピムは純粋な愛のために神の中に溶けこむ。わたしはこの三者を魂の中に見出す。それゆえ神を崇める人間は三重に天使のようにならねばならない。（四巻、一〇八）

シレジウスは、聖者は神の意志を体し、神の心に生きた存在であるので、神の使者、神の子、天使と見做している。つぎのケルビム（Cherubim）天使は、「神の認識に満てる者」の意味で、神の前に人間の祈りを運んでくる仲介の形態をとるといわれている。セラピム天使（Seraphim）は燃えたつもの、火焔天使とも呼ばれ、祈り、観想を司るといわれている。神はこの三様の天使により崇められており、シレジウスによれば人間はこの三様の天使になり得ると歌っている。

セラピムのような清浄な愛といわれる愛は、ひじょうに内面的で静寂に満ちたものであるから、外からはほとんどうかがい知ることはできない。（五巻、二一一）

六つの翼を持ち、神の輝きの眩しさをおおうているセラピム天使は、自らも愛の焔を燃やしている。シレジウスは外からは知られない静かな愛であると讃えている。

神はあらゆることをあらゆるものの中でなさる。セラピムの中で愛し、
玉座において統治され、ケルビムの中で瞑想なさる。（同、二一五）

セラピム天使を通して愛を燃やし、宇宙を統治、秩序を与え、ケルビム天使の中で瞑想する。シレジウスにとって自己の瞑想を通じてケルビムの神への凝視をこのように把握した。彼の瞑想より生れ出た「ケルビムのようなさすらい人」(Kerbinische Wandersmann) は彼のケルビムへの憧憬にもとづくものであることはいうまでもない。

ほんの一瞬でもおのれを超えて飛翔する人、このような人が
神の天使たちと一しょに
グロリア（栄光）を歌うことができる。（二巻、七二）

天使たちは「聖なるかな聖なるかな、聖なるかな万軍の主！　その栄光天地にみつ！」の讃歌を歌っているとい

う。「おのれを超え」、自己を棄却し、放念して、高く飛翔する魂の持主こそ、天使とともに歌うことのできる人である。シレジウスにとって天使は人間にとって近付きがたい存在ではなく、共に歌い、瞑想する親しい存在であり、人間の友となる存在である。

シレジウスはこの瞑想詩の最後につぎのような詩句で結んでいる。

友よ、もうこれで十分である。
もっと読みたければ、あなた自身が
文字となり、存在となりなさい。（六巻、二六三）

あなた自身が瞑想にはいり、神の心、天使の歌や祈りを聴き入りなさいと挨拶している。何気ないようであるが、短詩型をかりて瞑想の中で直観の閃めきを簡潔に吐露した詩作品である。

二　家の祝福と家の銘文について

家を建てたとき、あるいはその家の生活をなすに当り、「家の祝福」(Haussegen) の習俗がある。これは家の当主が作ることもあり、村の司祭が作ってくれることもあり、一定しないが、新築、改築、または一年の始め季節の農事の開始に際して、農家の当主が唱え詞として朗読する。叮嚀にするところでは、教会の司祭に来て祝福を与えてもらう。

神よ、この家を守り給え！
幸福は（家の）中に
災いは（家の）外に
ここを通り過ぎるそれぞれの人々に、
また交わりのため訪れる人々に家は開かれてあれ、
この家の内部にある者は生き生きとすこやかにあれ、
たえず日々の時に祝福あれ、
聖フロリアンがわれらを火事より守り、
倉庫の麦、畜舎の家畜、ぶちの牝牛、茶色い仔牛が
アルムへ楽しく駆り立ててゆけますように、
アルムの上では緑の草地（Wasen）があり、
牝牛も牡牛もともにのどかに草を食べますように！
わたしは聖エルハルディ（Erhardi）、
聖パトリツィ（St. Patrizi）、聖メダルディ（St. Medardi）に呼びかける、
これから聖者を新しい家へ迎えます、
神の母マリア、
また聖三位一体も
永遠に守護と祝福を賜わりますように！

先づこの家に幸いがあり、災いは出てゆくような祈りが始まり、この家に出入りする人々、交際する人々の祝福、一家の健康への願いをのべる。聖フロリアンは火事の守護聖者である。家畜が無事アルムの生活を過せるように祝福を祈る。聖エルハルディはレーゲンスブルクの遍歴の司教で一〇五二年没、家畜の守護聖者となる。シュタイヤーマルク地方では一月八日のこの聖者の日に、天幕型のエルハルト（エルハルディ）のパンが作られる。聖パトリシアは聖女、農耕の守護聖者、聖メダルディはフランケンの司教で五三〇年歿、天候の守護聖者で六月八日が祭の日である。この日に雨が降ると、四〇日雨になるという俗信がある。多くは地方的な聖者にとどまるものではあるが、いづれもアルムの生活を守護するのに不可欠な聖者である。

このような家の祝福とならんで、「家の銘文」（Hausinschrift）が生れてくる。銘文の詩句は概して家の祝福より短くなるのは自然である。また家の銘文はこれとは別個に家の主人によって作定され、彫刻師に依頼する場合が多い。しかし本来家と家族の幸福や繁栄を祈ることから、やがて銘文が生れ、人生観、宗教観、諺などが彫られるようになったとおもわれる。

つぎに家屋の構造をみると、ヨーロッパの家には破風その他白壁の空間部分が多い。白壁、あるいは黄色の壁その他の外壁で鮮明に家の存在を示すこともあるが、他面その広い空間に絵を画いたり、諺や詩句、聖句を書きつけることが多い。花、聖樹（樹木）、太陽、月はむろんのこと、麦束や農具の鍬、鋤、打穀機、箕などは、農耕生活の用具を画くことにより、祝福を得ようとする気持を表わしている。あるいは聖クリストフォロス、聖ウルバン、聖セバスチアンなどを画家（あるいはペンキ職人）又は画心のある者が自分で画くことも多い。マリアと幼児の聖母子像、キリストの十字架像、イマキュラータのマリア像なども目立つ。中には聖マルチンの一代記を画いたものもあり、牧畜生活による守護聖者、火災や水難などの救難聖者を守護と仰いで画いているものもある。一例をあげ

ると、聖ヨハネスの画像を画き、その下につぎのような祈りの詩句を添えたものがある。

おお聖ヨハネスよ、すべての危難や水難からわれらを守り給え、
なんじの恵みによりわれらを立て、
火の災いからわれらを救い給え、
なんじの切なる願ひによりわれに受継がせ給え、
われらが罪に死なず、
なんじとともに永遠の平安を味わい、
永遠に神の賞讃を受けむことを！

これはオーバーアンマーガウの町長の家の壁に誌されているものである。この場合聖ヨハネスに家の守護を願ったものである。しかし壁に聖者像を画くのは、珍らしい例で、棟木、家の入口、梁木などに、諺や祈願だけを板に彫り刻んだものが多い。

このような実例の類型をいくつかあげてみたい。

この家はわたしのものである。
けれどもわたしのものではない。
わたしのあとに来るもの

の家でもない。

現実世界に家を建てながら、家を自己所有のものでないこと、神の家を天に仰ぐキリスト教的態度が、いつでもこのような告白的銘文をいたるところで掲げていることを見ても一般性をもった銘文である。

至高の神に信頼を置く人は
決して砂上に建てたのではない。

このような銘文は、「愛する神に信頼を置く人は、堅固な礎に建てた人である。」といった、少し言葉のヴァリエーションのちがいで表わされることもある。北ドイツのアハマー（Achmer）のグリューネグラス（Grünegras）の家の銘文でははっきり農民としての自覚と責任を歌っている。

われわれは血の中に土の重さを担っている
大地を耕して幸福をつかむ、
汗と勇気で大地と闘い、
そこから祝福とパンを得るのである。

ここには厳しい北ドイツの風土に生きている農民の姿が髣髴として浮んでくる。ブレーメンハーフェンの湿地帯

の大平原で働く農民の姿を、ヴォルプスヴェーデ（Worpswede）の画家たちや詩人マイナー マリア リルケ（Mainer Maria Rilke）が画いたり、叙述しているごとくである。つぎのような苦難を味わいながら、家を建てた記念の銘文もある。

われらはよき希望を抱いてここに
穀物倉を建てはじめた。
この時残酷な死がやって来て、
誠実で愛すべき息子と弟を奪い去っていった。
このように神はわれらに苦難を与え、
よき教えを示してくれた。
神を信頼する者は、立派に生きる、
主にのみ栄光を帰する。

息子や兄弟の不慮の死にもめげず、神への信頼に生きようとする態度には、ヨブ記を想起させ、キリスト教的生き方の強靱さが感じられる。第二次大戦後にはつぎのような歴史的記録ともなる銘文を誌したものもある。

この建物は一九一三年一月二九日に生れ、一九四二年一〇月二八日にスターリングラードで戦死したわたしのただ一人の息子の思出となるべきものである。息子にとっては愛する故郷に再び帰ることはできなかった。寡婦とな

ったリナロブケの間に生れたシュミット、娘や孫とともにこれを建つ。一九五〇年母屋住宅の下の棟木に彫るこれはベルゼンブリッケ地方のボックラーデン（Bockraden）のハウスインシュリフトである。ここにはこの家に起った不幸を誌したのみで信仰的なものはない。

タウバー川の古い町ローテンブルクの家銘にはつぎのような単純なものがある。

世の波風の中でわたしの家が
しっかり立っていますように！

つぎのものはドイツ人の几帳面さ、堅実さを表す諺である。

礎をしっかりきづき、
定規と尺度と錘で
石と石をつみ重ねる、
家はあなたがただけのものではない、
子孫のためにたてるのである。

ドイツ人の家の建設は、自分一代だけのものではなく、子供、孫、それ以上の存続を前提としてプランをたてて

いる。この銘文は単純ではあるが、彼らが永続性を目ざし、がっちり建てようとする気構えがよく出ている。

神の助けと力により
ぜいたくのためではなく、必要のために
この家をわたしは建てた！

これはリッペ（Lippe）の民家の銘文である。これは可成一般的なもので、さまざまなヴァリエーションもあるらしく、つぎのようなものである。

神の助けと力によって
苦難からであってぜいたくではなく
（地上に）滞まるためにこの家は建つ
われら（人間）にとって住むべき家はけっして約束できない。

家の建築にあたっての銘文だけでなく、人生に処する上での信念の表明の銘文もある。

愛と苦難にあって
神はつねに

わたしの助け、慰め、祝福である。

家を人間の行為の現われの場として見る見方もある。スイス山地にのこっている銘文の一つがつぎのようなものがある。

神の祝福が家を充す、
祝福は出たり入ったりする。

あるいはアウグスブルクには時間についての諺を刻んでいるものがある。

時は分かち
癒し、
促がす

「分つ」(theilen) は分離させる。親子兄弟いづれは別れてゆくことを意味し、人間の出合うさまざまの苦悩、不幸を時間がいやしてくれ、しかも一処にとどまらず、ものごとを生成を促進させる。つぎの銘文は家の中での特殊な点を強調している。

あなたの言葉にわたしは満足している、
ああわたしは戸口にこれを書き留めよう、
天の大いなる主はつぎのように語る、
この寡婦をあなどってはならぬと。

おそらくこの家の主人が歿し、そのあとに残された寡婦となった女主人が仲々のしっかり者で一家をきりもりし、立派に家を建てたときに、この銘文を掲げたのではないかと推測される。あるいはこの家の寡婦となった娘のために、実家の父親がこのような銘文を書かせたのではないかとも推定される。いづれにせよ、モーセの誡めの言葉をもって神の孤児や寡婦、病者、弱者への労わりなどの配慮を神の言葉として宣言しているところに、キリスト教的文化の浸透した農村生活の特質がよく出ていると思われる。

この家を
蝸牛が世界を一めぐりするまで
蟻が渇きを医すべく
海を飲み干してしまうまで
神がこの家を守って下さるように。

これはヴュルテンベルク州ホーヘンミューリンゲン（Hohen-Mühringen）の農家の銘文である。家の存続の長

さの比喩に蝸牛や蟻を用いる素朴さは、すでに文学者の表現の世界には見られないものである。農民の中にはずっとこれが存続し、生きて用いられている。

この家は馬、豚、
牛
そして人の子（人間）のために建てられた。

旧い農家では同じ棟屋に家畜も人間と同居している場合が多く、同じ棟でなくとも、隣り合せが多い。家畜も家族と同一視する考え方は中世以来伝統的なものである。

わたしの家はわたしの世界である、
ようこそ、ここでだれかは気に入ってくれよう、

これはホルシュタイン州のハルテンホルム（Hartenholm）の銘文である。やはり農民の素朴さがよく出ている。強い頑固さを持ちながらユーモラスでもある。

家庭的であることは人間に
重苦しい時の戦いに力を与えてくれる。

家庭が人間の生きる力の源泉であることはしばしば語られてきた。家庭でのやすらぎが新たに生きる力、苦難に耐え抜く原動力となる。

もしわたしが一軒家を持ち、少々のお金があれば
わたしにとってお誂え向きである
鍬と鋤をとり
汗して働き
安らかに生きよ。

バイエルン州のクライルスハイム（Crailsheim）の農家の銘文である。ロマンティッシェ シュトラーセの途上にある小都市の農家の銘である。ささやかな生活に満ち足りて、仕事にはげむ敬虔な農民の気持を表わしている。

つぎの銘文は饒舌にたいするものである。

わたしと妻がこの家の主人である
わたしたちはおしゃべり者を家から外に追い出してしまう

饒舌は煩わしいものであり、とくに饒舌のために農事がはかどらないことを農家は嫌う。ヴュルテンベルク州の銘文であるが、ドイツ人は無口が多いのは、寒く厳しい風土と無関係ではあるまい。

憎悪
嫉妬を受けても
たおれることなく長く保持されているならば、
この家が世界の終りまでつづくであろう！

この銘文はノルトリンゲン（Nördlingen）市の黄金の牛というレストランに掲げられたもの（一五七四年建立、一九三〇年新たに改築）であるが、この諺は有名でさまざまなヴァリエーションがあり各地に見られる。それについては別に述べることにする。

この家には平安があり
神はわれらに信頼すべきふるさとであることを告げる
ようこそ、よき旅人よ、
中へおはいり下さい、喜ばしい休息をおとり下さい

この銘文はザルツウーフレン（Salzuflen）のレストラン兼旅館の諺である。これは広告の看板ではなく、入口の桁に彫ってある。けばけばしい広告をして宣伝につとめる現代の世相とはちがい、まだ純朴にお客にたいし、心をこめて挨拶をしていた時代の所産である。

訪れる人に平安を
滞在する人に喜びを
旅立ち別れてゆく人に祝福を、

これも前者に似ているが、チューリンゲン州のモイラ（Meura）にある監督教会の司祭の家に彫ってある言葉である。宿泊の家に限定せずとも、人生的な広がりを持つ内容を持っている。

老人に敬いを
若者には教えを
あなたの家のくらしをたて、
怒りからあなたを守りなさい！

この銘文は一六六〇年のヴィスマール（Wismar）のものであり、教訓である。

祈りや神の言葉なくしては
あなたの家は持続しない。

これは一九三五年、ホーエンボステル（Hohenbostel）のもので、今までに見てきたような信仰表白の銘文と一

連のものである。

舌は武器とする価値はあるが、
盾とすべきであって、剣とすべきではない。

ブランデンブルク州のマルク（Mark）に拠る。弁舌で正しい主張や考えをのべ、人々を納得させることは良いが、相手を攻撃したり、おとしめたりする武器としてはならぬという戒めである。

歌ったり踊たりするのは若者のこと
老人は古い道徳をよく管理すべきである。

鹿や猪を射止めようと思う人は、
まづ弾丸の打ち方を学ぶべきだ！

前者はベルクシュトラーセのベンスハイム（Bensheim）の諺、後者はドレスデンのものである。前者は古きよき時代の村の生活であり、後者は実行力を重んずる考え方である。

あなたが知っていることをすべていうなかれ、

しかしあなたがいうべきことをいつも知っていなさい。

これはヘッセン州フロンハウゼン（Fronhausen）の市役所に掲げられた銘であるが、この言葉の出典は詩人マティアス クラウディウス（Mathias Claudius）の詩句による。つぎのような諺もある。

あなたがきいたことをすべて信ずるな！
あなたがしようと思うことをすべてするな！
あなたが見たものをすべて愛するな！
あなたが知っていることをすべていうなかれ！

これはバーデン州のシュヴァルツヴァルトの銘文である。このような戒めは、家そのものについてのものではなく、人間の処すべき規範ともいえる。家族全体の教えとしたのであろう。

（一）

わたしを山の上に追い上げるな
わたしを山の上へおろして汗をかかせるな
飼葉桶のことでわたしを忘れるな

(二)

山への追い上げはゆっくりと
山よりの家畜おろしはよく注意して、
ひたむきに努めなさい！

前者はヴェストファーレン州のホルツハウゼン（Holtzhausen）の家畜小屋に書かれてあるものであり、(二)はヴュルテンベルク州のホーヘンミューリンゲン（Hohen-Muhringen）の銘文である。いづれも家畜の山への追い上げ、家畜下ろしのことなどの注意すべき点を三行でまとめている。(一)の場合は家畜の心持として表現しているところが面白い。

各人が自らを調整するのであるから、
いかなる意知悪な横暴も罰せられないことのないようにすべきである。

ローテンブルクの市役所（ラートハウス）に掲げられた銘文であるが、農民戦争で農民軍の拠点となったところにふさわしく、自由と自治の精神の旺盛をうかがわせるに足る。

神は偉大なるがゆえに
人間は神の前で身を屈げなければならぬ、

子供はひじょうに小さいので、その前で身を屈げるのである。

ヴュルテンベルク州のナーゴルト（Nagold）の銘文である。大いなるものと小さきものにひざまづく態度は敬虔な人間、愛にみちた人間の姿勢であるといっている。今までは大体無名の農民、山民、牧畜者の銘文をあげてきたが、つぎに文学者、詩人の銘文の詩句をとり上げてみることにする。

喜んで中へとおはいり下さい、
そして楽しく再びお別れしましょう！
あなたは旅人として通り過ぎる
門の前で（首途で）
神があなたを祝福して下さるように！

これはヨハン ヴォルフガンク フォン ゲーテの作である。このような精神的に豊かな内容になる前に、素朴な民俗的表現はいくつもあったであろうが、すぐれた詩人の能力を通じて潜在的に眠っていたものがはじめて開花したのである。

この宿場で
あなたをおろさせたものは何か、

駅馬者が吹き鳴らす角笛をききなさい、
すべては去ってゆかなければならぬのだ！

これはヨーゼフ フォン アイヘンドルフ(Ioseph von Eichendorf)の銘文であるが、アンマーゼー(Ammersee)のションドルフ(Schondorf)にあるハンス・フィッツナー(Hans Pfitzner)の農家の銘に刻まれている。曽っては町や村を結ぶ交通機関は駅馬車であった。愛別離苦の人生の姿を如実に感じさせるものは、旅である。つぎの銘文は無名の農民の彫りのこしたものである。

この地上でのわたしの人生は
他の世界へゆく途上の一つの旅である、
それゆえあなたは何がふさわしいか
わたしがここでなすべきことを
敬虔で賢こいものとさせて下さい。

人間の一生涯をここから彼方への旅として見、自らを旅人として考える。これを家の銘に刻んでいる。この銘文はラインラント州のものである。

あなたは客として招かれ、

パンとワインにめぐまれている。
さあ神の名において神に感謝しておとりなさい、
こごえていたらストーブに火が燃えています、
寒さで震えていたら、屋根と部屋が守ってくれます、
いつでもよい言葉を！

これはルートヴィッヒ デルレート (Ludwig Derleth) の詩である。宿泊所に掲げた銘文として、旅に疲れた人々を温かくもてなす気持をよく伝えている。とくに最後の「いつでも、よい言葉を！」はいい得て妙であり、家の銘文をなぜ掲げるかの共通の根本的態度を示す内容である。

運命は明るくあれ、
主の建てる魂や手があるならば、
この家も
この土地の菩提樹とともに
影を作り、大きくなるだろう。

この銘文はライナー マリア リルケが一八九九年、ヴォルプスヴェーデに滞在していたとき、農家が家を建てるに当り、その家の祝いの銘として詩句を送ったものである。ヴォルプスヴェーデには十九世紀にドイツでおこった

芸術運動でここに多くの画家たちが集って画業に専念した。詩人リルケもここに来てその画家について語り、荒涼とした泥炭湿地帯のこの地帯で大地に生きる農民と自然を叙述している。ハインリッヒ・フォーゲラー、モーダーゾーン夫妻、ミヒヤエル　エンデ等々の有名な画家が輩出した。建築した家とともに菩提樹が成長し、影を作るという表現にその一家の繁栄を願い、祝福の想いをこめたものである。

この地上にわたしの気に入った
場所を一つ選び家を建てた。
壁は木材と石でできている
天が窓越しに中をのぞいている。
（北側の壁）
涼しい影が宿っているこの北側で
あなたを見、
あなたが見ているものを、心を留める！
（南側の壁）
暑い日が灼けているここで
世界がどのように努力しているか
あなたを見てをります
（東側の壁）

ここでは光が力をもってどのように闇を打ち破るか
あなたは日々見ています
（西側の壁）
ここでは太陽が沈んでゆくことを告げます、
それは肉体もこのままこの家に長く住まないことを告げている。

家の東西南北について一つ一つ銘文を作っているところに、今迄に見られない表現の特色が出ている。シュヴァインスベルク（Schweinsberg）の自己の家のために、クロティルデ シェンク（Clotilde Schenk）が作ったものである。このような発想は最初に試みた人で終りとなりやすいが、文人的な趣きをもって味わいを出しながら、しかも同時に自らの戒めとしている。

われわれはここで客として一夜を過した、
この家は美しく良くもない
それは尤もなことだ！　われらはもう一つ家を天に持つ、
その家は全く別のものである。

この銘はツィンシェンドルフ（Zinzendorf）のニコラウス ルートヴィッヒ（Nicolaus Ludwig）の作である。人間は地上に家を建てるが、真実の家は天に在る。それを神の家と呼ぶ。神の家（Gotteshaus）といえば、一般に

教会を指す。しかしもう一つの宗教観念としては、神と人間が家族の如く睦じく、和やかに生きる天の国の意味でも用いる。キリスト教・ヘブライ系思惟には有限で生成変化して止まぬ地上の世界（現実世界）にたいし、永遠にして変化しない神の世界（神の国）を鋭く対比させる。この点ではギリシア哲学とくにプラトーン思想では現象界とイデアの世界に分ける二分法と共通点を持つ。すでに本稿で幾度も実例をあげてふれたように、この世界は仮象の世界であるがゆえに、一方から他方の実体の世界へと旅をする旅人として見ている。このような考え方は深い哲学的思索からも感じられるが学問教養の乏しい農民が一つの実存的な直観力によって家の銘文に彫っている点に注目したい。ここにあげた詩人の場合も直観力であることは、いうまでもない。しかしこの詩人たちも農民が生活で感取した銘文や諺を踏まえて、さらに文学的に多様化した詩句が生れていること、詩人といえども民族文化の民俗性を無視してはゆたかな芸術性を創むことはできない証拠でもある。

遠くからあるいは近くから
星の冠からやさしく
神はこの家を照らしている
そしてここにただよっている霊たちは
日常を超えて
この小さな生命を
しづかに永遠なものに高めてくれる。

詩人ヤコープ クナイプ（Jokob Kneip）の銘である。満天の星に照らされて、小さな家にも神とその守護の天使のやさしいいとなみを感じている。敬虔であり、祝福にみちた詩句である。

㈢

その立場にあって勤勉である人に
神は柔和な手で祝福を与える

勤勉を最高の美徳とするドイツ人には、神の祝福の根拠とも考えられている。北ドイツ、シュレスヴィッヒ、ホルシュタイン州にある農家の銘である。つぎの場合もほとんど同じに近い。

神は手のわざと真の努力を祝福し、
いつでも栄え成長させる。

フォークトラント（Vogtland）地方の家銘である。このような諺は可成り広くゆきわたっており、且つ長い歴史を持ち、個人的に表明される見解ではない。ここでは「手のわざ」（Handwerk）と訳してみたが、手仕事、手工芸を指す。広い意味での「手のわざ」、「労働」の意義についてヘブライ系の思想には、厳然とした原則と歴史がある。これはギリシアローマの文化が優れたものを沢山持っていたにもかかわらず、キリスト教の文化に摂り入れられた所以である。

金敷でわたしが鉄を鍛えるように、
各人はその幸福を鍛える、
夕方になってわれらが一日の仕事ぶりを見るように、
神よ、（幸福を）与えて下さい。

鍛冶屋がその鉄を鍛える行為を手のわざの比喩として、神への祈りをささげている。ヴュルテンベルク州の銘である。手のわざは手工業だけに限らず、広く農耕牧畜その他を意味する場合も多い。このような銘は当然鍛冶屋に掲げられたものである。

扉や箱の鍵は
いつでも必要である、
けれどもわたしが作ることのできぬものは、
口の鍵である。
もし悪い口に
鍵をかけなければならぬとすると、
気高い錠前屋よ
あなたの仕事はこの世で最善の仕事であるかもしれない！

これはヴュルツブルク市の錠前屋の銘文である。口に鍵を作る必要を説くあたり、律気さとユーモアがある。

ゴットリープベルガー氏は神のみ心のままに
新しい靴を作り、古い靴を修繕する

製靴手工業の時代、このような銘文を掲げていた。現代の広告のドギツく悪どい宣伝文に比べ、はるかに品位があり、ユーモアがある。

わたしのもとで立派な
農民らしい靴を手に入れなさい、
ああそれで天国へおいでなさい、
決して地獄へいってはなりません。

シュスターハウス（Schusterhaus）のものである。わが家の靴をはいて、天国へゆくようにといって、前の銘文と同じようにユーモアがある。概して農民よりも手工業者の方がユーモアや機智に富んでいる。

祝福がこの家に上から流れよ、
すべての鉄槌は祝福と讃美であるべきだ

インスブルック（Innsbruck）の鍛冶屋の銘文である。鍛冶の槌の音に神の祝福と讃美を感取しようとしている。自己の仕事への没頭と誇りから生れている。

この水車小屋で粉を碾く、
一つは移ろいゆく肉体を支える麦粉であり、
その上に聖なる食事の麦粉がある
そこには永遠に存続するパンがある。

ヘレンベルク（Herrenberg）のアンマー水車小屋（Ammermühle）の銘である。水車小屋で製粉にたずさわる人々も、二つのパンがあることを指摘する。地上の畑の麦と天上の畑の麦、地上の家と神の家、この二つの対比の上に人間の生活が展開している。

ここで新鮮で中味のこいパンが焼かれる
富める者にも貧しい者のためにも。
餓えている兄弟を忘れる者を
神よあわれみ給え！

アドルフ・ヴルムバッハ（Adolf Wurmbach）のパン屋の銘文である。後代にはいると、看板（Schild, 盾板）

に銘を彫ることもある。

喜びと苦難の中で
神はわれらにパンを与えて下さる。

これはホーヘンツォルレンのドヴィンゲン（Dwingen）のパン屋の銘文である。簡潔ながらパンを作る者の責任と信仰を表白している。

この家の中に在る
パンはあなたの身体を支えるためにある、
あなたの魂のためのパン、
神の言葉はあなたに頒け与えられる。

ローテンブルクのパン屋の銘である。前掲の銘文とほぼ同じ意味であるが、このように教会で司祭が語るような内容を、パン屋自身がわが家の銘としている点に注目しておきたい。

この世においてもっとも美しいヴァッペンは
耕作地の鋤である。

スパーテン（Spaten, 鋤）を農民は自己の紋章のごとく誇りにしている。大自然とともに生きる生活がかつては大部分の人々のものであった。

いかなる領主も国土に高く坐っているわけではない
彼は農民の手によって養われているのだ。

一八一六年、デッペンドルフ（Deppendorf）の農家の銘である。領主にたいし、農民は自己の存在への自覚を持っていた。かつての農民戦争はそれに基いている。

主よパンとワインを守り給え！
雹はたんに窓を打つにすぎない。

ザルツカンマーグート（Salzkammergut）の農家の銘文である。雹や霰を降らすことがあっても、神は人間に必要なパンとワインを恵み、かならず確保していることを確信する。

花にはこれを創った神の祝福があり、
花を作ることはもっとも美しい仕事である。

オーバーラウジッツ（Oberlausitz）州のベルンシュタット（Bernstadt）の庭園花卉栽培園主）の銘である。庭園の仕事や、花卉栽培に専念しながら、このような使命観を持つ。仕事とはマルチン ルターが表明しているように、神からの召命（Beruf）によるという職業観は、近世以降目ざましく展開してゆく。今までふれた鍛冶、パン製造その他の職業観がこれに基いている。

ワインとビールは飲むために神が作ったのであって、
溺れるためではない、そのことを心に留めよ。

シェーンヘングストガウ（Schönhengstgau）のミッヘルスドルフ（Michelsdorf）の酒屋にある銘文である。酒を売り、飲ませる店がこのような諺を掲げているところに、一七四五年代の時代の様相を伝えている。

神を愛することは喜びをつくる
ワインを飲むことは楽しみとなる
それゆえ神を愛しワインを飲みなさい、
そうすればあなたは楽しみ、喜ぶことができる。

エルツェン（Ülzen）の市役所の地下室にある銘文。市役所、村役場の地下室は大抵酒を提供し、食事も出るようになっている。酒を飲むのにも、神の心に適うように心掛けようとしたよき時代の銘文である。

生きるために学びなさい！

短い一行の銘であるが、核心的である。ムルダ（Mulda）の学校に掲げられている。すべて生活に生きる学問を目ざして、役に立つとともに、勉強の意慾も湧く。

真理はあなたがたを自由にするであろう。

これはフライブルク大学に書かれている銘文である。赤い砂岩で建てた大講堂の建物に金文字で書かれている。この言葉は聖書のヨハネ福音書八章三二節が出典である。パウロは福音の真理の意味で語っているが、しかし学問研究に励む大学において新たにこの言葉を取り上げるとき、新しい潮流と展望を感ずる。ちなみに日本の国会図書館にもこの言葉をギリシア語の原文で掲げている。

薬草や薬があなたがたを健康にしたのではない、
主の言葉がすべてを健康にするのである。

ルユーネブルク（Lüneburg）の市役所の薬局に掲げられた銘である。薬品を売る薬局でも宗教的態度の浄化の必要を強調していることに注目したい。

あなたがこの家に、住んでいる限り、
二人の客が出入りする、
その客とは愛と苦難である、
あなたはおそらく双方を受入れるべきである。

これはスイスのアーデルボーデン（Adelboden）にあった銘である。ヨブ記のヨブの言葉を連想させる。世の中には哲学研究家よりも人生を達観する人がいて、短かい言葉の中に集約して表現することがある。

人々はいつも
時代がますます悪くなるという、――
時代はいつもかわらない、
人々がますます悪くなるのだ。

前述のシェーンヘングストガウのミッヘルスドルフにある銘である。いつも人間は事が起ると「時代」という漠然とした実態のないものに責任を転嫁したがる。時代ではなく、人間自身に問題がある場合が多い。

地上のすべてのものは
季節をもつ

春と冬
喜びと苦難

これも前述のものと同じく、季節の変化と人生の盛衰、喜びと悲しみこもごもあることを告知している。リッペ（Lippe）のブロムベルク（Bromberg）の銘文である。

和合は小さなものを大きくし、
不和は大きなものを分裂させる

ボーデン湖のリンダウ（Lindau）の銘文である。これについてもはや説明は必要はない。ボーデン湖のリンダウはスイスを通ってはいってくる南ヨーロッパ、イタリアからの文化を受容し、新たな鋳型を作る中世の揺藍の地であった。ここには大きな修道院がある。

（一）

美しい言葉はあちこちに
よき言葉もそれぞれの場所にふさわしい、
真実の言葉はたえず植付けられる。

(二)

愛と誠実が家に在るところには
幸福と祝福もある、
不和と争いのあるところには
地獄がある。

(三)

信仰のあるところに、愛があり、
愛のあるところに、平和がある、
平和のあるところに、祝福がある、
祝福のあるところに、神がある、
神のあるところに、苦難はない。

(一)はブラウンシュヴァイヒの銘であり、(二)、(三)はオーデンヴァルトのエルツバッハ (Erzbach) のものである。いずれも家の者が身を処する上での戒めとしている。

(一)

平和が豊かさを作り、

豊かさは高慢を作る、
高慢が戦争を生み、
戦争は貧困を生む、
貧困は謙虚を作り、
謙虚が再び平和を作る。

(二)

神は貧しき者を
いつでもあわれもうとしてをられる

(一)は戦争と平和、高慢と謙虚、豊かさと貧困の因果関係を簡略化して語っている。ラインラントの銘である。(二)は一七四二年、ヘッセン州のドルテルヴァイル(Dortelweil)の銘である。ここでいう「貧しさ」は貧困よりは、謙虚、「心の貧しさ」を指している。

ほとんど無限に小径があるように見える
人生の青春にはそのように見える、
だが、いかに両者はくいちがっていることか。

リュテッツブルク（Lütetsburg）の銘である。ただおめでたい言葉をならべるのが銘文とは考えないところに、特質がある。

すべての時は、
あなたに傷を与える、
しかし最後の時に、
あなたは医やされるであろう。

これも人生体験、それも苦い滓のようなものを感じた人が、あとの人に残す銘文である。南ドイツに残っている銘である。

ひとは聖書を読むように
家の棟木の前に立たずむ

家の銘文（Hausinschrift）ははじめ聖書の語句をえらんで彫った。聖書でなくとも、貴重な人生体験、智恵のある言葉、警告の言葉などあり、まさにここに掲げたように、よき人生の指針、自省の材料になる銘文といえるものが多い。

それぞれの家は小さな教会であれ、
悪がそこにはいることなく、善がそこから出てゆくことのないように

この銘文はバーゼル市のものである。各家庭を小さな教会に見立て、善が出てゆき、悪がはいらぬ砦とする。これはスイスの宗教運動の中から生れた銘文ともいえよう。

あなたは自身を助けよ、
そうすればわれらの主なる神もあなたを助ける。

「天は自ら助くる者を助く」という諺は東洋にもあり、普遍的な内容をもっている。自分を助けようと努めないで、神の助けを求めるのは、愚かしいわざであるという諺である。ハンノーファーの銘文である。

すべてのものは移り去ってゆく
しかし神の言葉は永遠にとどまっている。

このような諺は、聖句、詩篇などにも数多く見られよう。しかし聖書を信じ、生きる市民の中に消化されて家の銘文として掲げられているところを考察すべきである。これは一六四七年、ハンブルクの銘である。

(一)

神なくしては――錨なき人生であり、
神の前にあっては――心貧しく、単純であれ
神において――豊かで優れてあれ、

(二)

夜に日にあなたは罪の前にあるが、
つねに神の現存を思うがよい。

(一)はラインラント州、(二)はオーバーバイエルン州の銘である。双方とも敬虔な庶民の宗教心情を伝えている。

悪魔やこの世俗の世界が
わたしを神から引き離そうとするけれど
わたしの希望は神に定めている、
彼はわたしによき道をたどらせてくれる。

これはビーレフェルト (Bielefeld) の泉の湧出する近くの家に彫ってある。この世に生きてさまざまな誘惑、まどわし、誤まりの中にあって、神に拠り所を置こうとする心の表白である。一七二三年の銘文である。

主イエスキリストよ、あなは風や海を
従たえた方である
それゆえあなたの手に恵みを保持し、
われらの航海にあたっても
嵐、盗賊、危険などに際し恵みを保持して下さい、
主よ、われらの航海をたえず守って下さい。

これはリューベック(Lübeck)の海運組合の建物に掲げられた銘文である。海上の危険から守護を求めるこの銘文は、ほとんど祈りであり、危険の多い生活では、切実な内容を持つようになる。

(一)

もし神が存在しないとすれば
夜警人、市の参事、顧問、国家等を
一体、何が守護し、監視するのか。

(二)

神にのみ信頼を置き
人間の助けをあなたはあてにしてはならぬ、

信仰を保持するのは神のみである、
さもなければ世界には信仰は存在しないであろう。

(一)はニーダーザクセン州の銘文であり、(二)はハーネンカム（Hahnenkamm）のヘーリンゲン（Hehlingen）の銘文であるは窮局には神の存在、その守護と恵みの問題である。

たれかが扉を叩けば、すぐ扉を開ける、
時折神が心を叩くとき、
心の扉を開かないのであろうか、

これもビーレフェルトのイェーレントルク（Ürentrug）の銘である。クリスマス間近かにクロッペン（Klopfen）の行事がある。戸叩きの行事はクリスマスの当来を告げるものである。戸叩きは神の訪問の比喩にも用いられる。

(一)

わたしの歩みは天にある
たとえわたしが地上に生きていようとも、
わたしはここではただ一人の巡礼者であるが、
彼処ではわたしは市民となる。

(二)

たとえ人間がすばらしく見えようとも
やはり地上の存在と見るべきである
人間は大地からとられ
再び大地に帰らなければならぬ。

地上に生きながら、天へ向って歩む巡礼者と見る表象は中世以来のものである。この語句はアウグスティーヌスの神の国からとられたものである。人間が地上のものに惑わされても、大地より生れ、土に帰る存在であることを肝に銘ずる。(一)はミュンヘン、(二)はヘッセン州のメルナウ（(Mellnau) にある銘文である。

(一)

戸口はしばしばちょうつがいで向きがかわる
おお人間よ、あなたの最後のことをよく考えよ。

(二)

この時間の中の小屋(ヒュッテ)にいて
永遠のあの家を考えよ。

(一)はディルクライス (Dillkreis) のアイバッハ (Eibach) 一七七九年の銘であり、(二)はジーベンブュルゲン (Siebenbürgen) のものである。有限な時間の中の家と永遠の家の対比は、一層鮮明に思索されている。簡潔で核心を衝いた諺である。

この家はわたしのものであり、しかもわたしのものではない
わたし以前もさうであったと考えられる、
彼はこの家を出、わたしがこの家にはいった
わたしの死後もまたさうであろう。

家にたいする所有観の否定は、人間の有限性に立っての実存感情である。このようなテーマの銘文は今までも挙げていたように、ひじょうに多く、信仰的教訓的なものが含まれている。これはラインラント州の銘文である。

神はわたしに三つの家を与えて下さった、
第一の家はわたしが時間の中で生きるもの、
第二の家ではわたしのやすらぎを与えてくれるもの、
わたしが口と眼を閉ざすとき、
神はわたしに第三の家をそなえて下さる、
それは天上の喜びと栄光の家である。

家を三つの段階で考えるとき、一層思索は深まってくる。前述の家もやはり、このような家の考え方を前提にしての表白である。この銘文はポーゼン（Posen）地方のものである。

主はわたしを「さすらう旅人」とされ、
すでに久しくわたしは別のものになっていった、
人間はまさに旅をしなければならぬ
一方から他方へと歩んでゆくのである。

さすらいの旅人の表象は、今までにここで幾度となく取り上げた。旅をすることによって人間的に変様し、天の住人となる道を目ざす。わざわざ家の銘文にしているところに、ヨーロッパ的特質が見られる。この銘文はローテンブルクのものである。

時間を永遠のように
永遠をこの世の時間のように見る人は
すでにすべての争いから解放されている。

この諺はおそらく神学者の言葉から引いたものであろう。永遠と時間の問題を家に掲げ、すべての地上の争いや苦悩を超えてゆこうとする。この銘文はハンブルク市の近郊ハムヴァルデ（Hamwarde）の司祭館に一九二〇年彫

られたものである。

蜜蜂が自分の家のために
草や樹木の花から蜜を集める。
あなたは賢い教えやよい躾けを
ここから運んでゆきなさい。

これはオーバーファルツ（Oberffalz）のシュヴァンドルフ（Schwandorf）の小学校の門に掲げられている銘文である。説明は要しないものであるが、勤勉に蜜を集めている村の蜜蜂たちを見て、やさしい校長先生がこのような銘文を考えついたのかもしれない。微笑をさそう銘文であり、村の小学校の情景まで思い浮べられる。

雹が窓（ガラス）を叩き壊すようなことがあっても
主よ小麦とワインをお守り下さい

これはヴィットラーゲ（Wittlage）にあるガラス屋の銘文である。わが家はガラスを販売したり、工作修理しているにもかかわらず、ガラスが砕けても、小麦とワインの守護を神に願っている。虔ましく、ユーモアも感じられる銘文である。

この家はわたしのものであり、しかもわたしのものではない、
わたしが出てゆき、あなたがはいってくる、
わが家族（子孫）よ、たれがこの家の最後となるのだろうか。

このような家屋と家族への銘文は、すでに類似した例を前にあげた。しかしこの銘文の作者はこの家の最後となるものは誰かなどと問うている点に、少々異る見方の人であることが分る。むろん家の永続を願っている言葉である。

恵み深き御母、マリアよ、
またやさしくあわれみ深き方、
われらをいつくしみ敵より守り給え、
あなたの御子がわれらを永遠に守り給え。

これは家にたいし聖母マリアへの守護を願う祈りであり、近世商業がさかんになるにつれ、マリア像、聖者像を家の廂、切妻、軒に造る風習が一般化した。それにともなって銘文も彫られた。これはインスブルクの店舗に掲げられたものである。

この家をわたしは神の御手に委ねる

ここでは三度火災で焼け落ちた。
今わたしは聖フロリアンを信頼し、
さらによく見守って下さるようお願いする。

オーストリア、シュタイヤーマルクの農家の銘である。この家はなぜか三度火災を出した。再建したのち、火災の守護聖者フロリアンにとくに祈願して再び火事が起らぬように銘としたものである。

老人を敬い
若者をよく教育せよ、
あなたの家を扶養し、
怒りを押えよ！

ヴィスマール（Wismar）、一六六〇年の銘である。子供に遺す教訓として彫ったものである。「怒り」は身を滅し、一家を悪い方向にもたらすことが多いので、とくにこれに注意せよと特記したのである。ドイツ人は生面目で勤勉であるが、反面それだけに慨して怒りやすいところがあるから、自戒の意味もあろう。

ねずみのいない家はなく、
穀のない麦はなく、

棘のない薔薇はない。

現在と異なり、ねずみは農家にはかならずいて、可成穀物を食べられた。麦はモミガラをとる、脱穀しなければならない。労苦の多い麦打ちが行われる。美しい花を咲かせる薔薇も棘があって、うっかりすると指を刺す。ここでは何事も完全に満足のゆくものは、この世界にはない。苦労をいとうな、忍耐強くあれという教訓である。ただしこのような諺はある特定の個人の表現ではなく、どこからともなく、たれからでもなく、口から口へと伝えられたものであろう。

三　アルムの習俗の一形態

まもなく班らの仔牛のような干し草の山ができれば、
われらはアルムに出かける
まもなく緑の帽子のような干し草の山ができれば
その後のアルムは快適である

このような民謡とも農事占いの言葉ともつかぬ諺がアルプス山地に伝わっている。アルム（Alm）生活と呼ぶ牧畜の生活形態がアルプス高地には昔からある。スイスやチロール地方、シュタイヤーマルク地方等々、ヨーロッパのアルプスの山岳地帯の独特のものである。夏の高原で長閑かに草を食べている牛や羊の放牧をみて、まさに牧歌的な風景と思ってしまうが、これは夏だけの風景であって、つねに存在するものではない。秋には早くも降雪にあ

って冬景色に一変してしまうのであり、夏も雪解けの後に、草が萠えでて、下の谷の村から家畜を追い上げるのである。このように夏のもっとも快適な三ヶ月半程の期間高原に放牧する生活をアルムと呼んでいる。アルムという言葉は古い先住のケルト人の言葉で、ゲルマン（ヨーロッパ系）の人々がこれを受継いで来たものらしい。ケルト人たちは家畜を高原に追い上げ、そこで牛乳、バター、チーズの収穫を得ていたという。まずアルムの家畜の追い上げについて考察してみたい。

春になって雪が融けはじめると、麓の村ではアルムの追い上げ（Almauftrieb）のことが話題になる。パウル ウェルナー（Paul Werner）によれば、アルム生活を主軸とするアルム農民たちは、曽ってはアルムマイスターを前年に選び、一緒に山に登って牧畜生活をすべき、アルム牧人ゼンナー（Sennner）やバターやチーズ作りに専念する若い女性のアルム生活者ゼンネリン（Sennerin）をだれにするか協議し決定したあと、農家をまわってアルムの生活に必要な食料、卵、肉、ベーコン、ブルスト、小麦、大麦、燕麦、塩などを受取り、その後、これらの物資をアルムの値段で他のものと交換したともいう。現在はこのようなことは行われていない。また家畜の追い上げの行事について昔はさまざまの祭があったことをマリラウン（Marilaun）が詳しく叙述しているが、今日では廃れ、もっぱら家畜下ろしの方だけが伝統として遺っている。アルムの経済生活についてさまざまな特質はあるらしいが、これは専門外のことであるのでここでは触れない。

家畜追い上げをいつ頃にするか、これは毎年村の人々の関心を寄せる点で、アルムマイスターは山の情況を見ながら、村のガストホフで牧人やゼンネリンたちと相談する。アルム追い上げの日はいつでもよいようなものの、やはり守護聖者の日などを選ぶようであり、守護聖者の祭の日は、その頃の季節の推移を見守っているようにずらっとならんでいる。

その日を挙げてみると、つぎの如くである。

聖ウルバン　五月二五日
聖ボニファーツ　六月　五日
聖キリアン　六月　八日
聖フィトス　六月一九日
聖ヨハネ　六月二四日
聖ペーター・パウロ　六月二九日

聖ウルバン（Urban）、聖フィトス（St. Vitus）は葡萄栽培の守護聖者であり、聖ボニファーツは霜や氷の聖者ともいう。聖キリアン（Kilian）はバイエルン地方で崇拝されている聖者である。シュタイヤーマルクの「家の祝福」の中で「まだらの牝牛、茶色の仔牛などを、アルムへ楽しく追い上げてゆけますように、アルムの上では、緑の草地（Wasen）があり、牡牛、牝牛かのどかに草を食べますように」と唱える一節についてはすでにのべた。この地方ではアルムが重要な生活となっている。晩春初夏、高山の雪が融けて牛の班らの模様のようになると、いよいよ家畜追い上げの季節となる。農民によると、家畜追い上げは毎年のことであるが、今年はじめて行うような未知の期待と不安がいつも感じられるという。追い上げの日時は山の高度、その年の寒暖の差で一定しないが、大体五月初旬から六月の下旬までといわれる。信心深い山の人々はさきにあげた守護聖者の日を選ぶようである。アルムにはつぎのような諺がある。

六月になると草は牛の口の中にまで生えてくるほどである。ところが九月になると牛は草を探し求めねばならなくなる。

これは一見して何でもないようであるが、六月には新鮮なよい牧草がアルムにあり、九月にはもう無くなるので注意せよという意味である。牧畜にとって新鮮な牧草が生命である。またつぎのような諺がアルム生活者の間に口伝えされている。

アルムの家畜の追い上げには、
アルムの $\frac{1}{3}$ が緑で、$\frac{1}{3}$ が
褐色で、$\frac{1}{3}$ が白いのが良い。

山の上には残雪があっても、おちこちに褐色の裸地が見え、日当りのよい下のあたりに若草が萠えでているのを最良の時機と見る。長年の経験からのものである。

アルム小屋を持つ農家の主人は下男を連れてさきに山へゆき、小屋の修理をしたり、石垣や垣根のくずれたところを直したり、家畜のゆく道をよく調べたりして、一夏のアルム生活の薪を準備したりする。村落共同のアルム小屋もあり、年々交代でアルムの生活ができるよう村の人々が用意することもある。

アルムの家畜追い上げは、夜中から出発の準備をする。二時頃村の農婦、娘、アルムのゼンネリンは潔めの水と臘燭の臘を牛に一、二滴たらし、元気で無事に帰ってくるように、神の祝福を祈る。

アルム マイスターを中心として有能な牧人が山羊を先頭に牛があとにつづいて村を出発する。牧童が行進のときのファールグロッケン（Fahrglocken）を鳴らし、ゼンナー、ゼンネリンなどが身の廻りの荷物を持ってゆき、村人たちに別れを告げる挨拶をかわす。村の農家の牛や羊を預って肥え太らせ元気に戻って持主に帰さなければならぬ責任がある。山羊と牛は先頭の順位争いをしたり、牡牛同志が角を突き合せて争うこともあるので、牧童も仲々大変である。この夜明けの大移動はやがて日の出とともに次第に険しい山腹にさしかかる。アルム小屋に到着すると、ゼンナー、ゼンネリンは早速「主を祀る隅」（Herr-Gottwinkel）に祭壇代りの布をかけ、十字架像を祀り、机の上には途中で摘んだ高山の花を挿したり、常備してあるバター作りの釜などを外に出して洗い、日光に当てたりする。牧草地で夜遅くまで飼料確保のために草を刈ることもある。いよいよアルムの生活が始まると、下の村から豚の一群を農婦や娘たちが追い上げてくる。アルムは牛や羊、山羊だけのものではなく、豚を肥やすのにも一役買っているのである。

アルムにおいて一番心配なのは、思いがけず訪れる降雪である。とくに一日だけでなく積ったままになる状態をおそれる。平地でさえ雪をかむった牧草はさける。孕み牛などは流産したり、病気にかかりやすくなるといわれる。そのために雪が長くなると、雪の少ないふもとへ下ろすことがある。これを「雪避け」（Schneeflucht）と呼んでいる。だから実際は山の上の放牧は画や写真で見るように長閑かで楽なものではない。落石、地崩れ、倒木があり、牛や羊が危険な断崖に近付かないように心を配る。ときには牛が足を挫くこともある。その手当もしなければならぬ。しかしアルムに来ると、新鮮な牧草を食べるせいか、乳の出は見違えるほど多くなり、牛たちも元気になる。ゼンネリンたちは働き甲斐がある。しぼった乳をモルケ（Molke）と呼ぶ。やがてチーズに作りの凝乳は豚の飼料になる。豚は大方は寝ているが、やはりアルムに来ると、肥え太ってよい豚になるといわれている。ゼンナーとゼ

ンネリンはこのアルムにいる間、よいバターとチーズ作りに専念する。預った農家ごとにそれぞれの収穫を分けるのも仕事の一つである。よいゼンネリンは働き者であるのが当前になっているが、次のような諺もある。

美しいゼンネリンがいると
汚れた牝牛となる
ゼンネリンはたえず若者に気が向き、
牛を放っておくからである。

このような冗談をいい合って、仕事をする場合が多い。しぼった牛乳を攪伴するときの唱え詞がある。「ビッツエルディ　バッツルディ」(Bitzl di, batzl di) これはミルク攪伴の音であるともいう。バタークリームを作るときの唱え詞がある。

たとえわたしのものにならなくても、
わたしは美しいものが好き、
たとえわたしのものにならなくとも
わたしは美しくなることを喜ぶ。

これなどはアルムの民謡へと自ら発展してゆくような弾みと内容がある。なぜゼンナー (Senner)、ゼンネリン

(Sennerin) というか。古いドイツ語では Senno (羊飼い) Schafhirte) であり、アルプスロマンス語に属し、元来にガリア語のサニオン (Sanion) 乳しぼりの人) にもとづくといわれている。地方によって呼び名が異り、パルテンタール、エンスタール地方ではシュヴォゲリン (Schwogerin) という。これはスヴァイゲ (Sweige 放牧地) に由来する。他方アウスゼーア (Ausseer)、ザルツカンマーグート地方ではアルムディルン (Almdirn) という。これはアルムで働く娘 (Dirn, diern) の意である。リーツェン地方ではブレンテルリン (Brentlerin) と呼んでいる。これはブレンタ (brenta, 薪桶) に由来するというが、ロマンス語でも、ゲルマン語でもないようである。

アルム農家にかぎらず、一般に家畜に名をつけ、それで呼んでいる。ただし羊や山羊には特殊な例外を除いて、一般に名をつけない。名で呼んでも反応がないからである。牡牛の名には Wald, Wies, Hirsch, Gams, Löry, Braun, Scheck, Zingg, Foich, Weix, Helm, Grull, Heiff, Leab, Bel などである。牝牛の名には、語尾に lo をつける。Waldlo, Hirschlo, Schecklo, となる。むろん牝であるから、他に Naglo, Veiglo, Schloßlo などがある。Naglo は「なでしこ」(Nelken) Veiglo は「すみれ」(Veilchen)、(Schloßlo は城の奥方 (Schloßherrin) の意味である。この他に犬や馬につけるような人名に近いものや、英雄空想的な存在の名も用いており、一定の決った型があるわけではない。牛などは自分の名をよく覚え、呼ばれれば、それに応じて動く。

アルムの牛たちは頸にグロッケ (Glocke 鐘) をつけている。クーベル (Kuhbell) ともいう。放牧地やゲレンデで突如濃い霧に襲われてもすぐ見出せるためである。頸も喉の下につけているせいか、雷にあっても落雷でたおれたという話はきかない。これがカランコロン　カランコロンとひびかせて、牛が草を食べている姿はいかにも長閑かで、アルムのよき一日であり、セガンティーニではないが、画に画きたくなる。また古い牧人、アルムマイスターは樫の木の杖に鉄輪を通し、これに七個、乃至は九個の小さな輪を吊している。これはアルムマイスターの象徴

となる。日本の山の行者やあるいは修験道の山伏が錫杖を持ち、山岳を抜渉する。こうした宗教的な持物がいかなるところから伝搬したものか、生活に必要なものとして自然に発生したものか、興味深い。アルムの牧人は狼や災いをする動物などを斥けるためにこれをチャリンチャリン鳴らした。長いアルムへの旅や放牧で疲れた家畜を励ましたり、思いがけず遠くへいった牛羊を追ったり、ときには打ったり、投げつけたりもする。

七月二十五日は、聖ヤコブ・大ヤコブの日（St. Jakobstag）が来ると、ゼンナーやゼンネリンたちは羊の夏毛を刈るのに忙しくなる。牛とちがって羊や山羊は険しい山道、断崖、岩場を平気で歩き、直接監督する必要がない。元来山に強い家畜である。アルムの上で夏毛がのびてくるので、ヤコブの日の頃刈り取るのである。丸裸になった羊の姿は少々滑稽であるが、いかにも涼し気で風邪をひきわせぬかと思うほどである。牛や羊をアルムに送り出した農家は、村に残した山羊がミルクを提供してくれる。アルムの家畜追い上げには別の方法もあり、放牧地を下から順次持っている村や農家は、一番よい草の状況を見ながら放牧して上に登ってゆく場合もある。すぐれた牧人はアルムのどこの牧草が今もっとも良い条件にあるか、残雪も消えていよいよ萠え出る斜面がどの辺にあるかを知悉して、適切な処置をとる牧人である。恵まれた清澄を空気と太陽、栄養ゆたかな牧草、長閑かな雰囲気、家畜もさまざまなストレスから解放され、乳の出も村にいるときより良好で、しかも濃厚になるという。豊かで充実したアルムの夏を過す。貧しくて労苦は多いがアルムに生きる人々は自由で快活である。彼らは笑っていう、「アルムには泥棒や盗人は来ない、ここには殆んど金目になるものがないからである」と。

アルム家畜下ろし

シュタイヤーマルク地方には、「聖ファイトの日にアルムの放牧場にゆき、聖ロザーレに再び谷におりる」とい

う諺がある。聖ロザーレはチロル地方のある伯爵の姫君で、一二世紀パレルモで苦行者として生涯を終え、守護聖女ロザリア（Rosale, St. Rosalia）として崇められた。この聖女の祭の日が九月四日である。この地方のアルムの行事の有様を伝えるものであるが、他の地方毎にそれぞれアルムの家畜下ろしの目安を伝える諺は皆ちがっている。やはり信心深い山の住民はいつでも聖者の祭日を目安にしているようである。

マリア昇天の日	八月一五日
聖バルトロメオ	八月二四日
聖ロザリア	九月　四日
マリア誕生日	九月　八日
聖ルペルト	九月二四日
聖ミカエル	九月二九日

、

アルムの家畜の追い上げと同じように、この祭の日に山から帰るという意味ではなく、これを目安にしてアルムから下る準備し、山の天候の状況をよく観察し、よしと判断して下の村にも連絡して引き揚げるとなるのである。ヴュルテンベルク州のホーヘンミューリンゲンの家の銘文（既出）が農家の家畜小屋につぎのように彫られている。

山への追い上げはゆっくりと
山からの家畜おろしはよく注意して

ひたむきに努めなさい！

五、六月の追い上げはまだ残雪があり、あわてる必要はないが、反対に八、九月の家畜下ろしは、いつ降雪があり、山の上が悪天候に急変するともかぎらない、くずくずするな、状況をよく見て早くおりるがよいと長い経験からの諺となったものであろう。実際アルムの牧人たちはよく自然の動きを観察している。牛乳をしぼっていて、「ヤコブの日はまだまあまあであるが、ラウレンティウスにはすでに髯が濡れるほどになり、バルトロメオは全く桶に落ちてしまう」という諺通りであるといっている。聖バルトロメオはもう八月も終りに近い。牛乳の出がちがってくるのである。ゼンネリンやゼンナーたちはキンポウゲ（Hahnenfuß）、タンポポ（Löwenzahn）、ハゴロモソウ（Frauenmantel）が咲いている間は、アルムにはよい飼料となる牧草があるが、コゴメグサ（Milchdieb, Augentrost）が咲き初めると牛の乳の出が衰えるといい慣わしている。コゴメグサは文字通りでは「ミルク盗み草」である。またツリガネニンジン（Glöckenbume）の類いの青い花も同じような諺がある。「ツリガネニンジンはミルクを一滴づつ奪ってしまう」（A Jedes Gleckerl nimmt an Tropfen Milch!）といわれている。別に因果関係があるわけではないにしても、盛夏、晩夏、初秋へと季節の推移を注目深く、敏感にアルムの住民は見守っているのがよく分る。

ゼンナー、ゼンネリンたちはアルムの三、四ヶ月の生活に終止符を打つために、その間に作ったバター、チーズを整理し、諸道具を洗い、アルム小屋を整備し、外から板を打ちつけて、風や吹雪がはいらないよう、不心得な盗賊などが窓が破れぬようにし、一切の準備を終えて、下山する。この場合も山道に強い山羊を先頭にするときもあるが、よい天候ならば、牝牛を先頭に牧童に導かれ、アルムをおりてゆく。この場合長い道を歩くときにつける大

きな鈴（鐘ともいう）を利巧な牝牛がカランコロンと鐘を鳴らしながら歩いてゆく。この牛は自分の役目を知り品位を意識しているようである。それぞれの牛の先頭の牝牛の額には花飾りをつける。花の刺繍の布をつけ、それにヤマカノコソウ（Speik）、アルペンローゼ（Alpenrose, Almrausch）、杜松（Wacholder）、カラマツ（Fichtenzweige）、などであしらった花の束を飾る。次の一、二頭にも少し簡略な花飾りをつけるが、あとは、角に白いテープを巻いたり、紙袋をかぶせたりする。但しアルムに滞在していた間に不幸のあった農家の牛には黒青の喪の花環をつける。この花環はその家ではあとまで大切に保存するという。又俄かに雪模様になると、牛に花飾りをつける余裕はなく、先頭の牝牛のみに止める。アルムの家畜下ろしは、下の谷の村の人々から見れば、「アルムの家畜迎え」になる。三、四ヶ月ぶりに再会する喜びが村全体が活気に満ち、やはり華やいだ祝いの気分になり、パレードを楽しむのである。伝令が飛んで牛の一行が近付いてくると、歓声があがる。牛の歩みはまさにゆったりとしており、アルムに長閑かに暮したせいか、すっかり悠長でおだやかな感じになる。わが家の牛を見つけて、その名を呼んだり、拍手をもって迎えたりする。とくにアルムで仔牛が生れ、家族の増えた農家では喜びが大きい。母牛から離れずに歩いてゆく仔牛の姿に笑い声が湧く。牛のパレードの終ってしばらくすると、山羊と羊の群が牧人と犬に連れられて、せわしげにやって来る。山羊や羊の長老格にも飾り紐を角につけてやることもあるが、牛のように間隔をおいて歩くことができず、ほとんどパレードにはならない。傍き道にそれようとしたり、遅れがちになる羊をシェパードが吠えて誘導し、そのあとを牧人が鞭を鳴らしてゆく。バターやチーズの製品の荷物を牛に背負わせたり、驢馬に積んだ行列がつづき、ゼンナーやゼンネリンも日焼けした顔をほころばせながら、村の人々に手を振ったり、挨拶を交わしたりして一層活気づく。村の広場ではアルムよりの帰還歓迎のブラスバンドが演奏され、それぞれの家に家畜が引き取られてゆき、アルムマイスター一行は教会で感謝の祈りを捧げ、司祭の犒いと祝福を受

けたのち、村の歓迎会で村の人々の乾杯を受け、大いにこの夜は飲み、且つ歌い、踊るのである。アルムの民謡などが主として歌われるのは当然である。アルムで働いた彼らの労をねぎらい、この夜の主役としてあつかいを受ける。すべての行事、雑務を終えると、この年のアルムの編成は解散となるのである。

しかしアルムの家畜下しは大方好天気の日を選んで行われるが、しかし山の天候が急変し、思いがけないハプニングが起ることがある。霧が立ちこめ、方向が分らなくなることがあったり、とくに雪が降ることがある。雨が雪に変り、家畜の山下りを困難にする。

秋おそくアルムを下るよりは、むしろ早く家畜の追い上げを好むものだ。

このように春の追い上げの方が楽で、秋の家畜下ろしのむつかしさを諺で伝えている。秋はおそくなれば、なるほど気候の激変に会わなければならないからである。とくに仔牛、仔羊などが慣れないために、思いがけぬ方向に行って行方不明になることがある。まさに聖書でいう「迷える羊」である。一旦下の村までアルムの牛や羊を下ろしたあと、翌日屈強の牧人たちが再び帰ってゆき、あちこちで声を出して家畜を呼ぶ。羊や牛は道に迷うと動物の本能で岩や樹のかげ、窪地に身をひそませてじっと待っている。牧人、牧童の声をきいて、鳴いてこたえる。疲労している羊を肩に乗せ、あるいは抱いて再び山を降りる。こうした光景はアルムにかぎらず、よく起る出来事である。聖書でキリストが語る羊飼いと羊の比喩は、現実の生活に根ざしたもので、百匹の羊を持つ人が、九十九匹をのこして迷える一匹を探しに出かけることは牧畜生活でしばしば見られるものである。これに宗教的意味を深めることは、宗教者の心情によるものであり、キリスト教（ヘブライ系）の宗教は牧畜生活と農耕生活に根ざした比喩

が多い。羊に呼びかけるとき、「レレ」(le le) といい、牛の場合には「セセコイト」(se se okiyt) と呼ぶ。

アルムの上では、山岳の危険性、気象条件の厳しさなどがあるために、牧人と家畜の間には平地よりも互いに心が通じ合う点が多いようである。たんに自己所有の財産としての家畜ではなく、生きている同じ存在として守り、庇おうとする態度があり、家畜たちもこれに答えようとする。人間の親切心が分り、敏感に動物も反応し、鞭や殴打もなく、いわゆる両者の間に微妙な友情、親愛関係が生れる。

アルムの牧人たちは、ホルンを吹き、ヨーデルを歌い、数多くの民謡の歌曲を生んだ。アルプス高地の生活は、はたで見るよりはるかに忙しく、重労働であるが、しかし下界の生活では味わえない自由があり、それを誇りとして来た。しかし現在その自由は犯されつつある。アルピニズムに資本が投下され、夏スキーに登山者がやって来る。氷河を観に観行客が訪れる。アルムの近くに観光用のヒュッテが出来、場合によってはそこまで自動車が登って来れるような道路が整備されているところもある。アルムはもはやアルムの牧人たちのものだけでなくなった。曽っての貧しいけれど自由な世界ではなくなりつつあり、清澄な山の自然も汚れるのではないかと思われる。そういう点も問題にすれば、いくつも問題点はあるであろうが、それにもかかわらず、アルムはやはり独特なものである。ベルヒテスガーデンから氷河湖ケーニッヒスゼー (Königsee) を渡って奥の高原に放牧するアルムは、船に何十頭の牛を載せ、つぎつぎに村に帰る家畜下ろしもある。場所によっては村の人々はトラックに載せてアルムを降りる方法もあり、その方が便利であると思われがちであるが、アルムの農家や牧人はそれを好まず、昔通りに牛に花飾りをつけて、ゆっくりと牧人やシェパードなどとともにアルム下りをする行事をつづけている。アルムの民謡として歌われている「アルムの別れ」(Obschied va da Olm) を取り上げてみる。

さあ、ゼンネリンよ、山小屋(ヒュッテ)を閉めよう、
雪風がヨッホから吹いてくる、
アナグマは穴に眠り、
狩師は注意深く警戒している
あなたが（アルムに）いなくなるのを喜んでいるかもしれない、
狩師はしづかに待っている、
鹿は交尾の鳴き声をし、
鞭がうなり、牛の鈴がひびく、
羊飼の少年がよろこびの声をあげる、
森をとおって山の方に鈴がこだまする、
やがてアルムは静かになり、
家畜小屋はひと気がなくなり、
家畜の群はいなくなり、
小屋は閉される、
再び春になるまで鴉と鷹だけがアルムにのこる。

これはエーゼルスバッハグラーベンのクノーリ ヒュッテ (Knolli-Hütte) において、ヴェルツアー タウェルンゲビルゲ (Wälzer Tauerngebirge) の作である。つぎの「父よ、あなたの与えるもの」(Vater, deine Gabe) は、

家畜を飼育し、それからミルクを与えられることについてのヨーロッパ人の考え方をよくあらわしている。父はいうまでもなく「父なる神」である。

一、父よ、あなたのおくりものは
　このミルクの飲物である、
　神よ、あなたのおくりものが
　われらをやさしくさわやかに元気づけてくれる。

二、浄らかなうつわに
　ミルクは雪のように純粋にきらめく
　そこの花の咲く谷では
　ミルクはクレーとして緑をなしています。

三、代々の父親らしく又賢こく、
　神よ、あなたはミルクをつくり、
　罪なき食物として
　さらにパンをわれらに与えて下さる。

四、ミルクは新鮮な血をつくる
　罪なき飲物であり、
　心を新鮮にしてくれる
　創造者に感謝しよう！

五、よき神よ！　あなたは
　けっしてわれらを誤つことなく
　ミルクによってわれらの魂を清め、
　頬を赤く健康にしてくれるのだ。

牛や山羊が緑の草を食べて提供してくれるミルクを「罪なき飲物」とよんでいる。血を流さず汚れたものでないことを強く意識している点に、ミルクの存在の重味が生活の根底にある。この点ではインド人も同じである。日本では牧畜文化はあまり、発達しなかった。鶏なども昔は卵だけを恵みとしていただき、肉は食べなかったようである。

山霊、山の精、カスマンドル、家の精

アルムに生活する人々を含め、山で生活する人々はきわめて信心深い。同時に古い信仰の残滓として迷信ももっていることがある。秋が終り、山々に雪が降り、厳しい張りつめたような山の大気、山の影を見て、山霊（山の

精）がおりて来たという。さまざまに姿をかえて、雲が夕焼けして、そのあと青黒い雲の不気味な気配を見て、山の精のせいであるとして、さまざまの行為を慎む。それらは山で暮らしている人々が森の中や霧に捲かれたとき出会ったとか、ときには猪や熊の姿に己の身を変えたとか、何度も同じところに来てしまうような迷路におち入ったとき、山の精に触れたとか、山の精の仕わざであると思うのである。とくにここではアルムに関係の深い精霊を考えてみたい。まづカスマンドル（Kasmandl）が広く牧人の間で話題になる。アルムに上って来て、夏の間家畜を放牧し、バター、チーズを沢山作るゼンナー、ゼンネリンたちは、夏の終りの到来とともに山を降りなければならない。ところがアルムの小屋にはカスマンドルのためにテーブルの上にチーズなどを残してやらねばならない。カスマンドルと夏の間仲睦じく暮して来たが、いよいよ別れるとなると別れを惜しみ、いつまでも山にいるようにとすすめる。のみならず、山を下るとき、小石をころがしたり、牛や羊を隠したり、悪さをするようになり、チーズを駄目にしたり、怪我を加えることもあるという。

翌年夏になって再びアルムを訪れると、カスマンドルのために残して置いたチーズはすべてなくなっている。それゆえアルムの人々は、これは間違いなくカスマンドルが食べたのだと信じて疑わない。カスマンドルは一種の精霊的存在であるから巨人的に表象することもあれば、小人のような存在とも見做している。山小屋の鉄鍋のうしろに潜んでいて、目立たない存在であり、頭が尖っていて、こっそり粥を煮ている。それがカスマンドルの仕わざのものと知らず、うっかり口にすると、顔中煤だらけになり、洗い落せなくなる。その代り他の悪霊や魔女などは決して危害を加えないといわれている。

男性的なカスマンドルがいれば、女性的なカスマンドルがいると考えるのが、自然なプロセスである。これを「カーセルヴァイプ」（Kasel-Weib）と呼んでいる。髪の毛に木綿のハウベをつけている。荷物や薪と一しょに、

うっかりカーセルヴァイプも背負い、ひょっとうしろをふり向くと、ひどい腰痛にかかる。ただし聖者の護符を腰につけていれば、心配ではないという。これらの精霊以外に屋敷神ともいうべき「家の精」(Häuschen) がいる。大低は墓の下にひそんでいて小さな存在で黒い眼をしていて、小悪魔 (Teufelchen) であり、煤や腰痛どころではなく、天国、地獄を時々見せてくれる。鋭い毛爪で摑まえられると、何のきよめも役立たぬという。アルムの人々はカスマンドルからの災いを避けるために、かまどの上に十字架を立て、キの字型に二つの木を二つ十字架をくくりつける。カスマンドルの別名に「アルムの大食い」(Almranzel) がある。カスマンドルは「ケーゼ」(Käse)「マン」(Mann) に由来し、家畜などの呼び名、得体の知れぬ存在の呼び名の「マンドル」((Manndl) と同じである。直訳すれば「チーズの精」という意味である。アルムの人々は、アルムでバター、クリームがよいチーズが醗酵するのは、自然の見えない精霊 (デーモン) の働きによるものと信じていた。自然霊の恩恵を受けて一夏チーズやバターを生産してきたアルムの人々は、山を下るにあたって、感謝のしるしにチーズをカスマンドルに捧げるのがその始まりであった。それがいつしか奇怪な山の精となり、大食いの怪物ともなった。多くの恵みを与えてくれた自然霊も秋の気配となり、冬の厳しい相貌となるにつれ、自然霊は敵意を持ち、人間に害を与え、傷つける存在となる。自然霊の二つの顔は、カスマンドルに限らず、醜い「ペルヒタ」(Perchta) 美しいペルヒタの場合でも同じである。

冬の冷い風が山岳から吹きおろすように、カスマンドルはアルムの人々を追って谷の村落までやって来て、さまざまな悪さをするという伝説がスイス、オーストリア、ドイツの各地に残っている。とくに十一月十一日聖マルチンの祭の頃「カスマンドルファールン」(Kasmanndlfahrn) といって、この山の精霊が村や畑にうろつく。これを追い払うのが「カスマンドル追い払い」(Kasmanndltreiben) の行事がある。これは丁度マルチン祭の頃、狼の

追い出しと内容的には似通ったものであり、ザルツブルクの地方では聖ニツコロの祭の頃、同時に聖ニコラスにちなんで騒がしく太鼓などを叩いてカスマンドル払いが行われる。この自然霊とは別に「アルムヴィヒテル」(Almwichtel) の伝説もある。アルムヴィヒルは「アルムの小人」の意で、広くゆきわたっているヨーロッパの小人伝説である。アルムの山中で長い髯を生やした小人たちが野性の山羊を放牧しているのを、見かけることがある。その時つぎのように歌う。

すばらしい方々よ、
赤いヤッケを着て、
山羊をもう飼わない、
わたしは走って去りましょう。

こうしてアルムヴィヒテルを賞讃すると、肥えた牛、よい羊、山羊などを恵んでくれるという。その他「ビッヒマンドリ」(Bichmandli) と称する小人もいて、思いがけぬ恵みを人間に与えるともいうが、両者にはほとんど区別はない。山の精 (Berggeister)、山男 (Bergmann)、野性の人 (Wildemann) などについてはすでに別の個所でふれているので、ここでは再説を避けたい。

四　麦蒔きの習俗

畑の土を耕やし、肥料を入れ、そのあとで小麦の種子を蒔く。どのような収穫となるか、農民ほど人間の弱さ、

自己の能力の限界を痛感する仕事はない。最大限の努力を払ってのちに、穀物、野菜の生長と繁茂は、高い世界の神の力に委ねなければならない。その際、教会や御堂での祈願がおごそかに行われる。それ以外に直接種子蒔きのとき、犠牲をささげ、唱え言を唱えることが多い。

わたしは小麦を蒔こうと思う
鳥たちは土を喰うがよろしい、
わたしの小麦はそのままにして置け！

種子蒔きに当って、鴉や野鳩、雀などが切角播いた麦の種子をつついて被害を与えることが多い。これを防ぐために、予め唱え詞を述べ、鳥に犯してはならぬことを宣言する。この場合三度唱える前に「父と子と聖霊の名において」をつけ加える。種子蒔きの日は神聖な日であり、火を家の外に出さぬこと、家族は家に閉じこもり、家長が自ら種子を蒔く。

もぐら、ねずみよ　食べよ、
野のけものよ　食べよ、
虫よ　食べよ、
ここに置いたものを食べよ、
わたしの蒔いたものには手をつけてはならぬ

父なる神と子と聖霊の名において、アーメン。

これは昔の習俗に遺っているものである。現在ではトラクターに乗って麦蒔きをする程、機械化されている。にもかかわらず、農民は一部は麦の種子を入れた袋を肩にして蒔き、神の祝福を願ってい唱え言をいう。マルクシュール（Marksuhl）地方では、野菜の苗を植えるときつぎのような唱え詞をいう。麦に劣らず、野菜も虫や鳥たちの害を防がねばならぬからである。

バルテル様が野菜におはいりなった、
虫どもよ野菜から出てゆけ、
キルメスのルール（Ruhl）の方へ、

バルテル（Barthel）とは聖バルトロモイ（St. Bartholomäu）キリストの十二使徒の一人で鉄挺のような強い信仰の持主の意で、八月二十五日が祭の日である。この聖バルテル様が野菜の中におはいりになり、野菜を守って下さる。キルメス（Kirmes）は秋の収穫の頃の教会の祭になっている。したがって虫たちは農夫の植えた畑から退いて森や原野に住むよりほかはない。このような唱え詞は、一種の呪術となるものである。つぎのような神の名において、野鳥などへの種子を荒すことへの禁止の唱え詞もある。

わたしはこの種子を蒔く

神イエスの名において
それゆえわたしは鳥から守る
この種子を食べてはならぬ

これらはいづれも素朴な唱え詞であるが、曽ってはこのような態度しか農民にとっては、方法はなかった。これはポンメルン地方エッゲ(Egge)で種子をわわざざ左手にとって蒔く。このような呪術的な唱え詞とちがい、詩で把握した種子蒔く農夫は一つの目的観、自然観が出ている。

一、種子蒔く人は麦の種子を手に一杯持ち耕やして柔かくなった土にまく、
すばらしいことだ！　農夫のまいた麦が再びよみがえる、

二、大地はそれを胎に受けとり、
しづかに芽がほどけ、
かわいい子供たちがあらわれ、
赤い頭をのぞかせる。

三、生れはしたが、種子は寒さにふるえ、裸で小さい
露と太陽の輝きを切に求め、

太陽は高い空から
大地は地からこの小さいものをやさしく見つめる。

四、しかし間もなく霜と嵐が近付き、
人間や虫たちはおそれて身をかくし、
幼い麦たちは逃れることもできず、
風と荒々しい天候に生きねばならぬ。

五、けれども苦難や悲哀も種子を傷つけない、
天は白い雪でおおい、
大地は麦を土でつつみ
麦は安らかにまどろむのである。

六、冬の不安な夜は過ぎ去り、
雲雀が歌い、麦は目をさます
春には樹々や草は花がさく

七、ちぢれた種麦はしなやかに

茎をのばしてゆく、
緑の静かな海のように
風に吹かれて波立ってゆれる。

八、そして高い天の幕屋から
太陽は穂麦の畑を見つめ
大地はしづかにかがやき
黄金の収穫の冠が飾られるようになる。

麦の種子が蒔かれて、稔りの秋を迎えるまでを歌っている。ヨーロッパの風土においては、秋蒔の麦は九月、十月頃蒔かれる。一斉に芽生えて新鮮な緑の麦畠は、いささか黄ばんでゆく他の樹々や草ときわめて対照的である。十一月半ば頃、雪が降り、芽生えた麦は雪の中に埋もれ、そのまま眠りに入り、翌年三月末か、四月頃雪が融けるとともに活発に生長する。その過程をこの詩は叙述している。むろん三、四月春になって土を耕やし、蒔く大麦、燕麦などもある。問題は種子を蒔く農夫は麦の生命をよみがえらせ、復活させる働きをなす存在、しかも太陽の熱と光、大地の見えない生産力とによって生命が生まれ、育くまれる大自然にたいする創造のわざに農夫が参加しているという点を讃えていることである。作詞はヨーゼフゲルスバッハ (Joseph Gersbach)、曲はフリートリッヒクルムマッハー (Friedrich. A. Krummacher) である。ドイツの農村生活にたいし、比較的ロマンティッシュな目で見ている点はあるが、農耕生活の深い生命のリズム、そのよろこびや意味を感じ取っているところに魅力があ

るといえる。

歩みを測れ！　手に撒く量を測れ！
大地はまだ若いままである、
そこへ麦粒が落ち、死んで安らう、
安らぎは甘美、それはそれでよいことだ、
土塊を破って一つ一つ目をさます
それはそれでよいことだ、光は甘美なもの、
この世界には何一つ無駄はない
すべては神の御心のままである。

これもまた種子蒔の農事の詩である。ミレーの農夫の画のデッサンではないが、歩幅を測りながら、袋の麦の種子を加減しながら、農夫は蒔いてゆく。「一粒の麦もし地に落ちて死なずば、ただ一つにて在らん」（ヨハネ福音書十二ノ二十四）のイエスの比喩のごとく、一粒の麦は死（犠牲）と再生（復活）の象徴である。この世界には無駄がない、神のはからいが働いているという宗教的確信に到達している。この詩の作者はコンラット フェルディナント マイヤー（Conrad Ferdinand Meyer）、一八二五―一八九五）である。

五　風の供物

すでに何度か冬の到来に当って、「荒々しい狩人」(Nacht Jagd)、「(Wilde Jagd) 魔の群 (Wilde Heer)) などの性格についてはふれてきたごとくである。農耕にたずさわる人々は、冬の厳しい風が吹き荒れるとき、唱え詞をいって供え物を捧げた。バンベルク地方では老婆が小麦の袋を手に持ち、窓から投げてつぎのように唱える。

可愛いい風を鎮まらせよ、
おまえの子供を連れてゆけ！

吹き荒れる風は嵐の神ヴォーダン (Wodan) と子供の見做し、主神ヴォーダンに供え物をし、家や畑に強い風を吹かぬように祈願する。ここにはキリスト教化されても払拭しきれない自然の働きへの対応があり、これは古いゲルマン宗教の要素から生れた習俗である。気負い立ち、咬みつくような野獣をしづめるように、風が飢えているからこれに飲物を与えてしづかにさせようとする感情移入である。ケームニッツ地方ではつぎのように唱える。

風よ、さあ見て見るがよい、
おまえの子供のためにムースを煮てあげよう。

ドナウ上流のムンデルキンゲン (Mundelkingen) の町では風をしづめるために黒いムースを煮る。老婆はいう、

「風の犬に餌をやるのだ」ムース（Muss）はジャガイモ、リンゴを蒸して、つぶしたものである。昔は子供たちの喜ぶ御馳走であった。バイエルン州のインタールでは嵐が近付いてくると、聖水を入れた皿を窓の枠のところに置き、机に蠟燭に火を付け、家の前に出て、小麦を掴み、風に向って撒き散らす習俗がある。スイスのケルンテン地方では、風が吹くと、木皿にいろいろな食物を入れ、家の前の樹の枝に載せておく。風の神ヴォーダンへの供物である。木皿には塩と灰を供え、それを手にのせて撒き散らす。

風よ、塩と灰がここにあるぞ、とりに来い、
おまえの妻や子供にとってゆけ、

このような唱え詞をいうのは、オーストリアのウィンディッシュガルストナー（Windischgarstner）の谷の村の習俗である。ノイキルヘンエッツェルヴァンツ（Neukirchen Etzelwanz）では手に小麦を持ち、空に向って撒ち散らす。その時、つぎのように唱える。

雄風よ、雌風よ、
ここにおまえのものがある、
わたしのものは残してゆけ！

旋じ風は不気味なもので、古い観念では雌風、雄風が追いつ追われつ戯れていると考えた。チロル地方にも同じ

ような風にたいする習俗がある。シレジア地方からオーストリアにかけて、やはり風除け、風鎮めの習俗があり、風がひどくなると、手に小麦をつかみ、窓から風に向って投げつけてつぎのように叫ぶ。

ここにおまえの取り分があるぞ、
吹くのを止めなされ！

このような言葉を発しなくとも、シュヴァーベンのエルティンゲンでは風が吼えて泣き叫ぶのは、風の子たちが飢じがっているから、何か食物を与えるという意味で屋根の上に小麦粉を撒く。また吼える風の犬に餌をやるのだともいう。「荒々しい狩人」「嵐の魔群」の眷族の犬に見立て、小麦袋に咬みつかせてしづめらせる。あるいは特に樹木を倒し、家の廂や棟を吹き破りそうな突風が吹くときは、塩と小麦のほかにパンとか果物などの供物を空に向って投げつけることもあった。

昔の習俗の中には風とならんで雹が降ってくると、パン籠を家の外に出し、その中に雹を受取り、小麦粉を蒔いた。また雷鳴電光を防ぐために、パンと塩またはパン種を屋根にのせておく。荒々しい冬のデーモンの群を味方として手なづけるために十二月二十日頃、小麦と塩をまぜ合せ、屋根の上あるいは棟のところに出しておくという習慣が下部オーストリアの山岳地帯にはあった。

種子蒔きにあたって鳥やけものにも麦を撒いて与えて畑を荒さぬように配慮する行為は、現代の文明の立場から幼稚な考えの如く見えるかもしれないが、現在の環境問題に観点を変えるならば、むしろ人間と他の生物との共存を考えているといえるかもしれない。冬の厳しさに耐えてゆく人間にとって、風を鎮め、その害を防ぐあり方は呪

術に向ってはいるが、根底には自然への畏敬感がはっきりとうかがえる。人間の拡張してゆく世界の中に侵入する生物や、人間の生活にはいり込む存在を一切認めないという合理主義は早晩に人間中心主義の傲慢な文明観は崩壊するであろう。そのためには人間の歩んできた過去の歴史、民俗習俗、芸術思想、宗教観などを仔細に冷静に考察する必要があると思われる今日である。予定の紙数をかなり超過したので、残された問題点については、稿を改めて考察したいと思っている。

（平成元年九月三十日、この稿未完）